
有栖キャロの小学校物語

b l u e o c e a n

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

有栖キャラの小学校物語

【Nコード】

N6362Y

【作者名】

blueocean

【あらすじ】

有栖零治に救われ家族に迎えられたキャラ・ル・ルシエ。家族に迎えられ、時期は秋に入る。そしてキャラは『有栖キャラ』として聖祥大学付属小学校へ入学する。

友達のルーテシア・アルピーノと一緒に転校したクラスはみんなからエローシユと呼ばれる男の子が中心となったちよつと変わったクラスだった。

これは魔法少女リリカルなのは 平凡な日常を望む転生者の番外編
です。

始めて見る人は本編キャラ紹介を読んでもください。

本編キャラ紹介（本編を読んでいる人は読まなくていいです）（前書き）

これは本作に出てくる本編のキャラ紹介です。

ここに書かれているキャラがよく出る予定です。

ここに書かれていないキャラも出るとはいますが、回数は少ないです。

多いようなら付け足します。

本編キャラ紹介（本編を読んでいる人は読まなくていいです）

有栖キャラ口

本作の主人公。

自身の住んでいる里を追放され、力尽きる寸前で、零治達と出会う。その後、零治の想いで零治の家族となり、有栖キャラ口としてこっちにやって来た。

性格は真面目で純粋。

知らないことが多いので、知識欲がある。

お兄ちゃんが大好き。

便宜上はシャイデ・ミナートが保護責任者。

ちなみにフリードはスカさんが開発したモンスターボールモドキの中にいて、そこから念話することで話すことが出来る。
ライの影響で阪神タロガースのファン

ルーテシア・アルピーノ

本作のサブ主人公。

元タスカリエッティのアジトにいたが、母親のメガーヌが目覚めたことにより、地球にやって来た。

メガーヌはまだ目覚めたばかりで、補助としてゼストも地球にいる。

まだ母親に会えたばかりで、喋り方が固い。
マイペースで、のほほんとしている。

キャラと同様に知らない事ばかりな環境が影響か知識欲がある。

ルーテシア的にはメガーヌとゼストをくつつけようとしている。

ライの影響で阪神タオガースのファン

有栖零治

本編の主人公。

転生者。

最初は普通の転生者同様に原作介入を考えていたが、もうひとりの転生者が先に介入してしまった為、タイミングを逃し、そのままズルズルと日々が過ぎてしまった。闇の書事件の後、マテリアルの3人を助け、その3人を家族に迎えたことにより、原作とは関わらない平凡な生活を望むようになった。

そして中学2年になってなのは達原作キャラと同じクラスになってから今までの生活が一気に変わる。

面倒だと思いながらも、ほっとけないと手を貸すお節介。
キャラの事が大好きで重度のシスコン。

ロリコンと言つとかなり怒る。

有栖星

星光の殲滅者。

なのはたちに負け、消えかかつてる所で零治と出会い、助けられ、それ以来ずっと一緒に過ごしている。

前まではなのはたちと遭遇しないためにも違う学校に通っていたが、事件に巻き込まれ、存在がバレてしまい、再び出会うことに。しかし、戦闘になるような事はなく、話し合いで済んだため、キャロと同時期に零治と同じ中学へ転校してきた。

真面目で、清純、大和撫子のような振る舞いから、前の中学では人気があった。始めは感情を表に出すことが少なかったが、最近はよく表に出すようになった。

オバケが嫌いで、怪談や、お化け屋敷など苦手。運動神経は悪くはないのだが、ボールを使う競技はからつきし駄目。

家では母親みたいな立ち位置で炊事、洗濯、掃除と全部星がこなす。太りやすい体質が悩み。

有栖ライ

雷刃の襲撃者。

星と同様に消えかかっていた所を零治に助けられ、それ以来ずっと一緒。

性格は明るく、ポジティブで元気が絶えない。初めて会う人物でも直ぐに仲良くなれる。

遊ぶことが大好きで、前の学校ではよく休み時間に男子とサッカーなどしていた。

運動神経はマテリアルの中で一番良く、近所のバッティングセンタ―でホームランキングになったり、ピッチングアウトでパーフェクトをとったりしている。

ただしアホの子で勉強もからっきし駄目。

スタイルが中学生ばなれしていて、いくら食べても太らないという女性の全てを敵に回すような体質を持っている。

ちなみに阪神タ〇ガースファン。

有栖夜美

闇統べる王。

星、ライと同じで零治に助けられて以来ずっと一緒。

一人称は我と偉そうにしているが、原作みたいに人を罵ったりしない。

最初こそ、偉そうな態度が目立ったが、色々濃いキャラが現れ、今ではすっかり常識人。

ここぞと言うときに零治は夜美を頼ることが多い。

人見知りが激しく、中々初対面の人と話すのが苦手。しかし、運動も出来、勉強も優秀と、3人の中で一番安定している。

ただし、はやてとは違い料理が全く出来ない。

最近は乙女本にハマっている。
悩みは身長も含め、余り成長しないこと。

フェリア・イーグレイ

有栖家の居候。

本名はナンバー5チンク。

スカリエッティの命令で海鳴市にいらっしゃる黒の亡霊（零治の事）を調査するためにこっちに学生として潜り込んだ。

現在は、その正体もすっかり分かり、ただ単に学生として過ごしている。

最初こそ世間知らずで箸も使えない状況だったが、今ではすっかり地球の生活に馴染んでいる。

性格は真面目で、しっかり者。

ただ、可愛いのが大好きで、可愛いものを見るといつもとは違くなる。

悩みは姉に見えないことと、中々成長しない体。

ジェイル・スカリエッティ

無限の欲望、次元犯罪者。

黒の亡霊に依頼したことから始まり、チンクの報告書を読んだり、地球の文化に興味を持つにつれてナンバーズとふれあい、父親とし

ての感情が生まれ、完全に善人化した。

脳みその興味が違う科学者に行ったこともあり、娘たちの事を第一に思っていて、ガジェット製作など全て停止している。

現在はまだ目覚めていない残りの娘たちの調整と自分の犯してきた罪の精算をしている。

最近の悩みは躰の仕方。ウーノと一緒に悩み中。

本編キャラ紹介（本編を読んでいる人は読まなくていいです）（後書き）

こんな感じだなと思ってくれれば良いです。

第1話 今日から小学生になります（前書き）

こんにちはblueoceanです。

本編でキャラを出してからずっとやりたいと思ってました。

やれて後悔はない！！

それでは本編をどうぞ

第1話 今日から小学生になります

「キャラ、忘れ物ないですか？」

「大丈夫です、星お姉ちゃん。」

私は靴を履き終え、側に置いたバッグを背負いました。

「それじゃあ、レイ、フェリア、キャラを頼みますね。」

「ああ、誰一人キャラには触らせない。」

「フェリア、レイはダメそうなのでお願いします。」

「了解した……」

お兄ちゃん……

流石に恥ずかしいよ……

「わー！！もうこんな時間！？星、なんで起こしてくれなかったのさー！！」

ライお姉ちゃんが大声を上げながら星お姉ちゃんに文句を言っています。

「ちゃんと起こしました！！それでも起きなかったライが悪いんですー！！」

「そんなことより早く着替える。このままだと我らも遅刻するぞ！」

「わ、分かってるよ」

ライお姉ちゃんが慌てて部屋の中を行ったり来たりしてます。

「じゃあ、俺達は先に行くな。」

「はい、気を付けて・・・」

「キャロ、車には気をつけるんだぞ。」

「はい、行ってきます！」

そう言って、私は元気よく玄関の外へ出ました。

ピンポン。

マンションの一階降りて、インターホンを鳴らしました。

「おはようございますー！」

「あら、おはようキャロちゃん。ルー、キャロちゃん来たわよ！」

ドアを開けてくれたのはゼストさん、挨拶してくれたのはルーち

やんのお母さん、メガー又さんです。

「おはよう、キャラ。」

「おはよう、ルーちゃん。」

「おはよう、フェリア、レイ。」

「ああ、おはよう。」

「おはよう。」

普通に朝の挨拶をしている様に見えますが、ルーちゃんの頭はボサボサです・・・

恐らく寝坊したのだと思います。

「ごめんなさいね、もう少しで準備終わるから・・・」

そう言つてメガー又さんはルーちゃんに声を掛けて、部屋の中へ入って行きました。

今日から学校なのに落ち着いてるな、ルーちゃん。

私なんて緊張して中々眠れなかったのに・・・

「キャラちゃん。」

「は、はい!」

「ルーテシアを頼む。のんびりしているから苦労すると思うが・・・」

「俺もいますし大丈夫ですよ。」

「零治、ルーテシアに手を出したら、地獄を見ろと思え・・・」

「だ、大丈夫ですから、デバイスしまつて・・・」

ゼストさんもすっかりお父さんですね。

「お待たせ」

「やっと来たか。ルー、ちゃんと行ってきますを言っただぞ。」

「行ってきます。」

「行ってらっしゃい。」

「気を付けてな。」

「行ってきます。」

こうして私達は学校に向かいました・・・

「キャラ、動きが固くなってるぞ・・・」

「は、はい!!」

うつつ、やっぱり緊張しちゃうな・・・

「ルー、そっちじゃない!!」

「・・・あれ？」

フェリアお姉ちゃんが慌ててルーちゃんに声をかけてました。
ルーちゃんは何故か左の小道に進んでいて、フェリアお姉ちゃんが
気がつかなかったら迷子になっていたと思います。

ルーちゃん、目を離したらすぐ何処かへ行っちゃうからな・・・

「ルー、私と手をつなごう。それなら問題ないだろう。」

「はい。」

「・・・それでは後はお願いします。」

「はい、分かりました。あなた達も中等部に遅れないようにね。」

「はい。じゃあキャロ、ルー、頑張れよ。」

「は、はい!!」

「ハイ。」

「それじゃあ行くか。」

「ああ。」

そう言ってお兄ちゃんに行ってしまいました・・・

ちよつと不安だな・・・

「さて、先ずは私の自己紹介ね。私はあなたたちのクラス、1 - 1の担任の細野霧子よ、よろしくね。」

「は、はい！よろしくお願いします!!」

「お願いします。」

細野霧子先生。

すごく綺麗で若い先生だけど優しそうだな。

「先ずは軽く校内の説明ね。一年生の教室は・・・。」

そこから先生の校内の説明が始まりました。

「まあ緊張しないで、クラスのみんなは・・・変わってるけど、友達思いのいい子達ばかりよ。」

「は、はあ・・・」

随分間があつたけど、変わってるってなんだろう？

「ルーちゃんは大丈夫？」

「ルーは大丈夫。キャロはルーが守る。」

「中には敵なんていませんから大丈夫よ。取り敢えず私が呼んだら入ってきてね。」

そう言つて、先生は教室に入つて行きました。

「キャロ。」

「何？」

「友達一杯作ろうね。」

「そうだね！！」

『今日は新しく皆さんの友達になる子がいます。』

『うおおおお！！ようやく俺にも嫁が！！』

『・・・既に女の子と思つてゐるあなたの将来を心配するわ。』

『先生の言葉じゃない！！』

『うるさいわよエローシュ。』

『俺は江口伸也！！エローシュちゃんわ！！』

『はいはい、エローシュ君、静かにね。』

『エローシュちゃん！』

・・・既に盛り上がってますね。

『先生、どんな子ですか？』

『二人共可愛い女の子よ。』

『・・・・・・・・片方はピンクの髪の子、もう片方は紫の長い髪の子。』

『・・・・・・・・小岩井君、正解だけど、どうして知ってるの？』

『・・・・・・・・僕に不可能の2文字は無い。』

『3文字ね、全く、また職員室で盗撮したでしょう・・・・』

『そんな事実はない？』

『なぜ疑問形なの？』

『先生、岩つちは悪くない、俺達男子は先生の際どいアングルを撮りたかっただけなんだ！！』

『かばってるようだけど、他の男子にも飛び火してるわよ。』

『そつだぞ、黙れエローシュ!!』

『しゃべりすぎだぞ、アホエローシュ!!』

『変態!!エロガキ!!だからエローシュって呼ばれてるのよ!!』

『ふっざけるな!!勝手に変なあだ名つけたのかと思えば、今度はエロいからだと・・・あれ?ベストマッチじゃね?』

『・・・もはや変更しようがない。』

『あきらめるな親友、何かあるはずだ!何か・・・』

いつになったら中に入れるのでしょうか・・・

『もういいから一旦静かに!!これ以上転校生を待たせちゃいけないじゃない。それじゃあ2人とも入って。』

と、とうとうこの時が・・・

ま、また緊張してきた・・・

「行こう、キャロ。」

「は、はい!」

私達は教室に入りました。

「は、はじましゅて、あ、有栖キヤ、キヤロでしゅ！」

パチパチパチ！！

皆さんが暖かい拍手を・・・

って何かが違う気がする！

「キヤロちゃん可愛い〜俺と結婚してくれ〜！」

「黙れ変態エローシユ！！！」

「やかましいから夏穂は黙ってる！」

け、結婚って・・・

私はお兄ちゃんに・・・

「ルーテシア・アルピーノです。もしかしたらグランガイツになるかもです。」

ええっー！？聞いてないよー！？

「確かに仲がよかったけれど、それほどだったの！？」

「結婚式のときは是非来て。」

「うん！今日の内にお兄ちゃんに言っておくね！」

よかった、今日はすぐ帰ったらみんなに報告しなきゃ！

「あのね、二人とも・・・」

「はい？」

「歓迎しようとしてたあの子どもがかわいそうだから、後にしてもらっていい？」

「あつ。」

みんなを見てみると気まずそうに手を下ろす人がしばしば。

恐らく拍手してくれるつもりだったんだと思う。

何かごめんなさい・・・

「さあ、質問タイムよ。好きな質問をどうぞ。」

「はい！」

「はい、花井さん。」

「好きな食べ物は何ですか？」

好きな食べ物ですか？

えつと・・・

「私はシチューです。」

「ルーはハンバーグ。」

「俺はまさかのカツオのカルパッチョ!!」

「いや、聞いてないから……」

「ていうかエローシュ君？それって居酒屋のメニューじゃないのかな？」

「いやいやいや、こんな子供がウォッカやテキーラやほろ〇いを飲めるわけじゃないですか」

「……詳しい。」

「むしろ飲んででしょ？」

「そ、そんなことねえよ夏穂。ほろ〇いなんかはジュースと変わらないかと思ってないから!!」

「……エローシュは黙ったほうがいい。」

「エローシュじゃないし！」

「アンタね……どうせおじさまのせいでしょうけど、この年でアル中何て話にならないわよ……」

「大丈夫、基本ほろ〇い一本しか飲まないから。」

「飲んでる事に問題があるのよ。」

女の子に怒られて静かになると思いきや、今度は3人で口論し始めました。

私達蚊帳の外……

隣のルーちゃんも流石に気まずそう……

「ほら、その仲良し3人、転校生が蚊帳の外だから、少し静かにしてなさい。」

「……はい……」

さつきからあの3人ばかりが喋ってるような気がするなあ……

「ごめんなさいね、あの3人は幼稚園の前からずっと一緒にいたいで仲がいいのよ……」

「そうだぜ！俺は江口伸也！」

「またの名をエローシュ……」

「そうエロ……って違う!!」

「あんたらね……私は千歳夏穂よ、よろしく。」

「……小岩井佐助。」

「はい、よろしくお願いします!!」

「よろしくお願いします。」

少し変わってるけど、仲良く出来ると思う。

「まあ困った時は俺に相談してくれ。一応俺がこのクラスのリーダーだからさ。」

「……江口君がリーダー？」

ルーテシアちゃんもそう思ったみたいで微妙な顔をしています。

声に出さなかった私達は偉いと思いますけど。

「……そうだよ、どうせ俺なんかがリーダーできるわけ無いって思ったんだよな。分かるよ、どうせ俺なんてみんなからエローシュって呼ばれる変態だし、女の子にもモテないしな……」

あれ？凄く自分を攻め出しましたが、どうしたんでしょう？

「……エローシュはナイーブ。」

「勝手に復活するから気にしないでいいわよ。」

「そうですか……？」

少し不安でしたが、千歳さんに言われた通りに気にしない事にしました。

「あまり対した質問でしなかつたけど、後は自分達でね。二人は窓側の空いてる席を使つて。今日は歓迎会という意味も込めて、この後学校案内とレクをするからみんなそのつもりでね。」

そう聞いたクラスみんなは一斉に盛り上がった。
さっきまでブルーだった江口君も混ざってる。

レクってレクリエーションの事かな？

そんな事より、私は始めこそ緊張していたけど、いつのまにか普段の私でいることに気がつきました。

このクラスの雰囲気緊張も吹っ飛んでいたみたいです。

お兄ちゃん、学校って楽しい所ですね。

第1話 今日から小学生になります（後書き）

基本、あの3人とキャラ、ルーテシアと後で出るもう一人の女の子をメインで進みます。

更新スピードは本編と同じスピードでやりたいんですけど、本編中心で更新しようと思います。

次は学校案内、レクです。

・ 恐らく本編と同じ様に誤字、脱字が多いと思うので、ご了承ください・・・

これからよろしく願います。

第2話 どろけいは警察と泥棒の戦争です（前書き）

こんにちはblueoceanです。

本編と同じスピードと思ってましたが、3時間位で書き終わってしまいました。

やはり最初は速く書き終わるな・・・

それではどうぞ・・・

男子の殆どが血の涙を流してる。

そう言えば、お兄ちゃんも星お姉ちゃんからエロ本没収されてものすごく泣いていたけど……

「ゼストもエロ本取られて泣いていた……」

「エロ本ってどんな内容なんだろうね？」

エッチな内容だっていうのは分かるけどな……

私とルーちゃんは首をかしげてその光景を見ました。

「ここはプール！！そして今年の夏、先生のスク水は素晴らしかった！！相棒！！焼き増しはすnderるか？」

「……問題ない。」

「じゃあ一枚500円。」何だと！？ちくしょう！！今週はモンポケのカードを買ったために貯めていたのに……お金は……」

「小岩井君、その写真没収です。」

「なん……だと！？」

当たり前だと思います。

「ここが我が小学校で有名な聖堂！！でもぶっちゃけ要らないと思う。」

「エローシュ、それはないんじゃない？」

「エローシュ言っな！！」

「ここで全校集会をやったり、公演を開いたりします。」

「大きいですね〜」

「広い〜」

「二人共聞いて！？」

「……」

「ここは屋上。一応開けているけど、間違っても柵を登ったりしないでね。基本的にはお弁当を食べたりするのにここを使ってるわ。」

「なるほど〜」

「……」

「えっと・・・・・・・・どうする？」

「どろけいってなんだろう・・・」

そう言えばそれはお兄ちゃん達から聞いたことが無いなあ・・・

ドッジボールの事は星お姉ちゃんから詳しく聞いてるけど・・・

「それじゃあどろけいで。」

「分かった、どろけいね。みんなー！どろけいしますよー」

凄く楽しみです。

「ルールを説明しよう！！ルールは簡単！！警察が泥棒を捕まえる。それだけだ！！」

「違うでしょ・・・捕まっても、檻にいる泥棒をタッチすればまた逃げられるの。制限時間までに全員捕まえれば警察の勝ち。逃げ切れれば泥棒の勝ち。あつ、ちなみに校内に入っちゃ駄目だからね。」

なるほど・・・

「それじゃあ警察と泥棒に別れましょうか。」

先生の一声で私達はそれぞれ別れました。

警察

千歳、ルーテシア、e t c（クラスの3分の1）・・・

泥棒

エローシュ、小岩井、キャロ、e t c（クラスの3分の2）・・・

「諸君、作戦を説明する！！」

校舎裏にある物置小屋裏で、泥棒のみんなが集まっています。
ちよつと狭いけど、我慢しよう。

「各自逃げるのは複数で逃げる。捕まっても救出に一人で行くことを禁止する！片方が捕まった場合は誰か別の組と行動するように！」

そう言われて、男の子一人が手を上げる。

「エロ隊長、どういうことでしょうか？」

「エロ隊長はやめてくれ！内容は簡単だ、単独で助けようとしても

返り討ちにあっただけだからだ！」

次に別の男の子が手を上げた。

「ですが、少数になった場合はどうしますか？」

「その時はこの忍者の末裔佐助がみんなをパパッと助ける。だから無理して救助に当たらなくていい。」

「任せろ……。」

サムズアップして宣言する小岩井君。
凄く自信があるみたいです。

「よし、それじゃあ、最後まで生き残って勝利の美酒を飲もうじゃないか……！」

エローシュ君がそう宣言して泥棒のみんなは散らばりました。

「なるべく見つからないように……。」

私はハッキリ言って運動が苦手です。
と言っても家の皆さんが運動神経が良いだけなのかもしれませんけど……。

あつ、ちなみにルーちゃんは運動神経良いです。

アジトで走り回って速くなったって言っていましたけど……

羨ましいです……

そんなわけで私はブランコ裏の茂みに身を潜めています。

隠れるのは得意です!!

「有栖、ここにいたのか。」

「あつ、エローシュ君。」

「エローシュちゃんわ!……でみんなどうだ？」

「うまく逃げているみたいだよ。」

2人で基本動いているので、追いかけても分断するってやり方でうまく逃げています。

足の速さもそこまで違いがないみたいで、警察が迷ってるうちに逃げ切っています。

「よし、これで捕まっても、相棒の影の薄いスキルシャドーがあれば捕まった奴らも逃がせる筈……」

「小岩井君逮捕!!」

「はあああああ!？」

エローシュ君、立ち上がって凄く大声でビックリしました。それほど予想外だったのでしょう……

「……おかげで隠れてるのがバレました。」

「……済まない、油断した。」

「一体何があつたんだ!？」

「佐助は校庭に落ちているエロ本に食いついたわ。単純ね。」

そう言つて千歳さんが勝ち誇つた顔をしています。

「くっ、だが逮捕される価値はあつた。」

「夏穂!!俺の分は?」

「必要ないでしょ、エローシユは運動神経並みだから。」

「ガッデム!!」

頭を抑えて大きなアクションを取りました。

「くそっ、なぜ俺にはオリ主特典がないんだ!!あの見習い神が憎い!!」

何を言つてるのかさっぱりですが、取り敢えず、神様に八つ当たりしてることだけは分かりました。

「みんな、あそこにエローシユがいるから!エローシユさえ捕まえれば、勝つたも同然よ!」

「おっ！」「！！」

追いかけていた警察が一気にこっちにきます！

「有栖、逃げるぞ!!」

「はい！」

私はエロ―シュ君とその場から離れました。

「エローシュ君、こっちは？」

「だ、駄目だ！視界の悪い所はいきなり現れて逮捕つて事もありえる！」

そう言うてるエローシュ君ですが、ハッキリ言って私より足が遅いです。

ですが、まだ逃げ切ってる所を見るとクラスのみんなより足が遅い
って訳でもないみたいです。

「つて言うか……有栖……速い……」

「エローシュ君、息切れ早い!!」

スピードも落ちてきました。

このままじゃまずいです・・・

「・・・・・・・・有栖。」

エローシュ君はいきなり逃げるのを止めました。

「どうしたのですか？逃げないと捕まってしまうですよ!!」

「・・・・・・・・俺を置いて早く逃げろ、ここは俺が抑える。」

「なっ、何を言って・・・」

「いいから!!このままじゃどのみち二人共捕まってしまう!!有栖、お前は俺より足が速いんだ。俺が抑えている内に早く逃げろ!!」

「でも・・・・・・・・」

「有栖!!!!俺の屍を超えて行け!!」

「!!エローシュ君・・・・・・・・ごめん!!」

私はエローシュ君を置いて一人で逃げました。

「ごめんなさい、あなたの犠牲は無駄にしないから!!」

「ああ、泥棒の仲間を頼む!!!!・・・さてお前ら。」

エローシュは警察の前に仁王立ちになって立ち塞がった。
その体からは威圧感が漂っている。

「ここから先は行かせねえ!!!」

エローシュの咆哮は警察を怖気付かせた。

「この先には俺の好きな女がいるんだ!!!死んでも通すか!!!」

エローシュの覚悟は強烈で他を圧倒している。

「どうした、怖気付いたか？俺は全員でかかってきてもいいんだぜ？ただし……」

「覚悟のある奴だけ「タッチ」……」

エローシュの肩にはルーテシアの手が乗っていた。

「エローシュ、確保。みんな、キャロは結構足が速いから複数で追いかけて。」

「「「「「了解!」」」」」

ルーテシアの指示の元、他の警察が動き出した。

「あの……アルピーノさん？」

「どうしたの？泥棒は余計な事は喋らない。」

「空気読んでくれないんですか？」

「長くなりそうだし、ありきたり。」

「ダメだしされた!？」

「はあはあ……」

キャロです。

残りの泥棒もあと僅かになりました……

それを見て警察は檻の守りを少なくして、泥棒を捕まえに行っています。

ハッキリ言ってピンチです。

ですが……

「これはピンチでありチャンスです……」

里から追い出されてから培ってきた隠れる能力。これを活かす時が来ました。

「確かこうして……」

ライお姉ちゃんが言っていました。

『有名な傭兵はダンボールに身を潜めるんだって。』

確かにライお姉ちゃんがやっていたゲームのおじさんはダンボールに身を潜めて敵のアジトに侵入してました。

そして運がいいことに、ダンボールも始めにいた小屋の脇にありました。

「よし、準備完了です!」

檻は花壇に囲まれた旗の棒が立っているコンクリートのスペース。

目標に向かって、私は行動に移りました。

「なあ相棒、エロ本は？」

「没収された……」

「あ、いや、ドンマイ。」

「エローシュこそ……」

「くっ……」

エローシュ君、エロ本見たさに捕まった訳ではないですよね？

ピタッ。

「あれ？こんな所にダンボールあったっけ？」

「用務員のおじさんが置いていったんじゃないの？」

そう言つて男の子2人組は行きました。

どうやらやり過ごせたようです・・・

ゆつくりと、音を出さないように・・・

「あと、誰が捕まつてない？」

「有栖ちゃんがまだ〜！！」

「恐らく隠れてると思うから念入りに探して！」

「分かつた〜！」

恐らく千歳さんが指示を送ったんだと思う。

けれど、これで警察の人数も更に減りました。

チャンスだ。

「ルーちゃん、有栖ちゃんがどこにいるか分からない？」

「うつん、キャロって私よりは足は速くないんだけど・・・」

まだあの二人にはバレていない。

距離ももう少し。このまま進めば・・・

「ん？ダンボール？」

「結構汚い・・・」

「えっ！？どれ？」

何でエローシュ君と小岩井君が反応するの！？

これじゃあバレちゃうー！

「・・・怪しい。」

ルーちゃんがそう言って近づいてくる。

こうなつたないちかばちか・・・

「・・・それ！」

サッと立ち上がって、かぶってたダンボールをルーちゃんに投げました。

「くっ・・・」

ルーちゃんも動きが少し止まりました。

「しまった!!」

もう遅いです！！

千歳ちゃんの距離だったら、捕まる前に泥棒を逃がせます！！

「私達の……勝ちです!!」

そう言いながら一番近くにいたエローシュ君にタッチしました。

「どろけい、警察チームの勝ち〜!!」

「イェー!」

ううっ、負けてしまいました・・・

あの後、決死の思いで泥棒を逃がしたのですが、半数以上が千歳ちやんとルーちゃんの前に逮捕。

逃げたみんなも帰ってきた警察に逮捕されて、直ぐに全員捕まってしまうした。

私ですか？

疲れていた上に、ルーちゃんに追いかけられたら勝てません……

キンコンカーンコン……

「はい、チャイムがなったのでここまで。教室に帰って、帰りの会するわよ。」

「……………はい！」「……………」

みんなが反応して下駄箱に向かいます。

「あゝ、ちくしょう。有栖ちゃんのおかげで逃げられたのに……」

「夏穂のバカ体力には驚く。」

「うるさいわね、別にいいじゃない……」

確かに千歳ちゃんはルーちゃんに負けないくらいの速さでみんなを捕まえていました。

「それにしても2人は運動得意なのね。」

「そうだな、それに有栖のダンボールにはマジでビックリしたぜ！」

「僕も驚いた……」

「私も……」

「えへへ、お姉ちゃんのゲームを見て、思い出したんだ。それと私の事はキャラでいいよ。」

「そうか、なら俺は「エローシュ。」そうエローシュで・・・って佐助!」

「もう諦めろ。」

「そうね、佐助の言うとおりかも。」

「そんな現実みとめねえ!!そんな幻想俺がぶち壊してやる!!」

「うん無理。」

「無理。」

「無理だね。」

「無理ですね。」

「くそ・・・みんな大嫌いだよ!!」

泣きながらどこかへ走って行ってしまいました。

「いいんですかね?」

「いいのよいつものことだから。」

「そうだ、気にするだけ仕方ない。それと僕は佐助でいい。」

「なら私も夏穂でいいわよ。」

「ならルーもルーでいい。」

「はい!! 皆さん、これからよろしくお願いします!!」

お兄ちゃん、早速、お友達ができましたよ!!

第2話 どろけいは警察と泥棒の戦争です（後書き）

とこんな感じで3人と友達になりました。

次はメインとなるもう一人の女の子の話にしたいと思います。

それが終わったらオリキャラ紹介したいと思います。

次は本編の方を中心に書こうと思いますが、こっちがまた早く書き終わったら投稿しようと思います。

次もよろしく願います！

第3話 1年1組はとっても良いクラスです（前書き）

こんにちはblueoceanです。

今回最後のメインキャラが出ますが、話のメインはエローシュです。

それではどうぞ・・・

第3話 1年1組はとっても良いクラスです

さて、私が小学校に入って3日経ちました。

クラスのみんなとも仲良くなれて、毎日がとても楽しいです!!

「さあ皆さん、今日は昨日あった事を作文で書いてみてください。枚数は自由でいいですけど、最低1枚は書いてくださいね。」

国語の授業、私はハッキリ言って苦手です。

算数と英語は得意なんですけど・・・

「ルーちゃん。」

「何？」

「作文・・・得意？」

「苦手。」

やっぱり・・・

私達はひらがなを覚えたばかりですし、漢字もまだ完璧には覚えていません。

「取り敢えずやれるだけやろう。」

「そうですね。」

私は作文に集中しました。

20分後・・・・・・・・

「出来たああああ!!」

いきなり的大声にクラスのみんながビックリしました。

どうやら声の主はエローシュ君みたいです。

「先生、どお？」

「まだ読んでないわよ・・・」

呆れながら先生は作文に目を通し始めました。

「・・・・・・・・まあいいでしょう。しかしよく難しい漢字知ってるわねエローシュ君。」

「エローシュちゃいます！俺ってこんなだけ勉強好きで幼稚園の頃から天才で名が通ってたから。」

うわっ、先生凄く驚いた顔をしています。

「何でそんな顔!？」

「だって、自分から天才って言うなんてね・・・・・・・・」

「そつち！？それと痛い子を見るような目で見ないで！！時々先生は俺の事をいじめてるのかと思っちゃうよ！！」

「・・・・・・・・・・」

「反論しないの！？」

まあ先生があんな態度を取るのはエローシュ君だけだろうな・・・

「いいから、後は寝るなりボーツとするなり好きになさい。だけどこの教室から出るのだけは駄目よ。」

「うーっす。」

そう言つてエローシュ君は自分の席に戻つて寝始めました。

「エローシュ君凄いな。」

「私負けない、キャロは私の物。」

ちよつと怖いんだけどルーちゃん・・・・・・・・

「昼飯タイム！！！」

今いるのは中庭。

ここで5人で円を描いてお弁当を食べています。

「ちょうどいい気候ね。気持ち良いわ。」

「そうですね、昨日は曇ってたので今日は特にそう思います。」

そう言いながら私はお弁当を取り出しました。

「今日も星姉？」

「うん、そうだよ。本当はお兄ちゃんが作るって言っただけど、『お弁当は私が作ります！！レイは邪魔しないでください』ってお兄ちゃん追い出されてた。」

「やっぱり星姉は強い。」

私もそう思います。

「ねえキャロ、話に出るお兄ちゃんは一人だとして、お姉ちゃんは何人いるの？」

「えっと……4人だよ。」

「えっと、そうなると8人家族？」

「8人？家には6人しかいないよ。」

「えっ、それって……」

「そう、私の家には親がいないの。」

そう聞くと、申し訳無さそうな顔をする夏穂ちゃん。

そんな顔、友達にしてほしくないなあ。

「そんな顔しないで。私は今とっても幸せだし、何よりみんなに会えたから。」

「キャラ・・・」

「素晴らしい・・・」

「いい子や！」

「エローシュにキャラは渡さない。」

「フハハハ、私は欲しいものは必ず手に入れる！例え・・・あつ、ルーさん、俺のおかずそれ以上食べられるとご飯しか残らないのですが・・・」

「この世は弱肉強食、悔しかったら強くなれ。」

「じゃあ、私はソーセージ。」

「僕は、グラタン。」

「あつ、なら私は卵焼きをもらいます。」

「あああああ！？俺のおかずがあああ！！」

この世は弱肉強食です、エローシュ君。

あつ、卵焼き美味しいです。

「や、やめてください!」

「うるせえ!! いいからよこせ!!」

昼食後、トイレに行った帰り道、男の子の怒声が聞こえてきました。

私は声のした方へ行くと、そこでは一人の女の子が4年生位の男の子5人組に囲まれていました。

「か、返して!」

「見ろよ!こいつ生意気に高そうな宝石持ってるぜ!!」

「本当だ!すごい高そう!」

「お願いします、返してください・・・」

「へん、俺にぶつかった罰だ。これは俺が没収する。」

「!?!返して!!」

「うるせえな!!」

そう言っ腕をつかんできた女の子を突き飛ばしました。

上級生なのに!!

「何してるんですか!？」

私は注意しようと走って行きましたが、

「おい、これ以上は面倒だ行こうぜ。」

そう言って男の子は行ってしまいました。

くっ、顔が見えなかった・・・

「大丈夫ですか？」

「ぐすつ・・・えつぐ・・・有栖さん？」

「真白さん？」

絡まれていた女の子は真白雫さん。
私のクラスメイトでした。

いつも物静かで少しみんなから距離を置いているような子だったの
で、話すのは今回が初めてです。

「どうしたんですか？」

「私の大切な物を取られちゃって・・・」

「大切なもの？」

「蒼色の宝石・・・」

そう言えば宝石がどうか・・・

「どうしよう・・・あれがないと・・・」

目に涙を一杯に貯めて泣きそうになってます。

手伝ってあげたいけどどうしよう・・・

「どうしたんだ!？」

そんなとき、慌てた様子でエローシュ君がこっちにやって来ました。
・・・

「・・・なんのつもり？」

五時間目の授業をしにきた細野先生が言いました。

教卓にはエローシュ君が立っています。

「先生ごめん、今から大事な話があるんだ。少し時間を貸してくれ。」

いつもとは違う雰囲気のエローシュ君に私とルーちゃんは驚いてます。

「みんな聞いてくれ！！さっきの昼休みに俺達クラスの仲間、真白ちゃんが上級生の男の子5人組相手にいじめにあっていた。その時真白ちゃんの大切なものがその男5人組に取られた。これは俺たち1年1組に対しての宣戦布告だ！！俺は断じてクラスの仲間をいじめたやつを許せない！！だからみんな、俺と真白ちゃんに協力してくれ！！」

エローシュ君はみんなに頭を下げてお願いしています。

何かかつこいいです。

「・・・何水臭いこと言ってるんだよ。」

「そうだが、同じエロ紳士同盟の仲間じゃないか。」

「それにエローシュ君に振り回されるのはいつものことだしね。」

「私もこのクラスのためなら力を貸すよ！」

男の子も女の子もみんな賛同します。

こんなにエローシュ君は信頼されているんだ・・・

ただのエッチな変態さんじゃなかった。

「ありがとう、みんな。・・・それじゃあ次の休み時間に作戦を・・・」

「いいわよ、このまま続けなさい。」

「先生！？」

「本当は私が行きたいくらいだけど、あなたが行くって言うなら私はそっちを尊重するわ。思いつきりやりなさい！後のことは全部先生に任せてね。」

「ありがとう先生、大好きだ！！」

そう先生に言っ、再びみんなの方へ向く。

「さあ、みんな、作戦会議を始めよう。」

エローシュ君による作戦会議が始まった……

放課後……

今、私達は4年3組の前にいます。

人数はクラスの半分の男の子と女の子。

先生にお願いして、帰りの会を短縮。

4年3組が終わるよりも速く、こっちに來て待ち伏せています。

『勝負はあっちの担任が職員室に戻る前までに話をつけて、返してもらっ。』

これが今回の作戦目的です。

佐助くんの調べだと、宝石を奪った男の子の親がPTAの役員らしく、しかもモンスターペアレントらしいです。

PTAとモンスターパーARENTは意味が分かりませんが、エロシー君と夏穂ちゃん、先生に佐助くんは険しい顔つきになっていました。

何か良くない要因なんだと思います。

「よし終わったぞ！」

4年3組のクラスの中が騒がしくなってきました。
どうやら帰りの会が終わったようです。

「よし、夏穂班、先生を確保！話が終わるまで絶対に教室から出さな！」

「了解！！」

「よしエローシュ班、今からターゲットに接触する!!」

了解、武運を祈る。

エローシュ君は耳に付けている小型マイクで佐助君に言いました。

佐助君は今は一入別行動しています。

何をしてるかは先生と夏穂ちゃんしか知りませんが……何でも特別任務らしいです。

「行くぞ、みんな!!」

私達は4年3組の中に入りました。

「何だお前ら!!」

教室の窓側、そこに5人組の男の子がいました。

「真白ちゃん、あいつら?」

「う、うん、間違いない・・・」

真白ちゃんは少し震えながら答えます。

「そうか。おい、よくも昼休みは俺のクラスの仲間をいじめてくれたな!」

エローシュ君はわざといじめたって所を強調しました。

「おい、一体何を言ってるんだ?どこに証拠がある?」

「」「」「そうだ、そうだ!」「」「」

「この子がお前らを見ている。」

「本当に俺か？お前は実際に見たのか？」

余裕の表情でリーダーの男の子が言いました。

「そう言うだろうと思ってたさ。だかな、お前らは一つミスをした。確かにいじめただけだと証拠を立証するのは難しい。だって誰も見ていなかったんだから。だけどな……」

エローシュ君は一旦切って、名探偵みたいにリーダーの男の子に指を指しました。

「お前は真白ちゃんの大事なものを奪った。……言わなくても分かるな？」

5人組はしまったって顔をしています。

「俺達の要求は2つだ。1つ目はそれを真白ちゃんに返して謝る。2つ目は俺達1年1組に一生関わらないだ。そうすれば今回は見逃す。……どうする？」

「な、何を勝手な事を言ってる！！俺たちが持つてるとは限らないだろー！！」

「だったら荷物を調べてもいいだろ？もちろん服のポケットやロッカーの中も念入りにな。」

「クソっ……」

「ど、どうする？」

「す、素直に返した方がいいんじゃないの？」

「だ、大輝君……」

「うつ、うるせえ！このままガキに舐められたまままでたまるか！！」

そう言つて大輝と呼ばれた男の子がポケットから、真白ちゃんの大切な蒼い宝石を取り出しました。

「あっ！？」

「返すのか？」

「ああ……って素直にするかよ！！」

そう言つて窓から宝石を思いっきり投げました！！

「ああ！！」

「くはははははは、ざまあみろ！！これで証拠も無くなった！！俺がその女をいじめた証拠は完全になくなったんだよ！！ほらどうする？どうやって俺のやったことだつて証明する？お前らの負けだ！！」

大笑いしながら大輝と呼ばれた男の子は言いました。

「狂ったか？俺達以外にも証人はいるんだぞ？」

「お前たちこそ甘い！俺の親はPTAの役員だ。それも上位のな。このクラスの先生含め、誰も俺に逆らえない！！」

そ、そんな！！

私は夏穂ちゃん達が確保している先生を見ると、夏穂ちゃんたちが止めているのを振り切って、教室から出ていました。

「さて、形勢逆転だな。どうする？全員で土下座したらそのクソガキ以外は許してやってもいいぜ。」

エローシュ君を指さして言いました。

どうするのエローシュ君？

「おい、どうした？せっかくチャンスを上げてるのに、不意にするつもりか？」

勝ち誇った顔でみんなに言います。

悔しい……何でこんな奴が……

どうしよう、お兄ちゃん……

「おいどうするんだよ！！いい加減にしないと全員しめるぞ！！」

『準備OKだ。』

「……………了解した。」

エローシュ君？

「さて、もういい加減終わりにするか。これ以上付き合ってもらうのも悪いしな。」

いきなりエローシユ君がそんな事を言い始めました。

「何だ？いきなり壊れたか？」

「今、何時だ？」

えつとちようど4時ですけど・・・

「先生の話は聞いているかい？先輩。今日はこの学校でPTAの会議をするみたいだぜ。ちようど4時から。」

「一体何を言ってるんだ？」

「黙ってな、直ぐに分かる。・・・佐助、やってくれ。」

『了解。』

そう言つと、教室にあるスピーカーから音が流れ始めました。

『くはははははは、ざまあみろ！！これで証拠も無くなった！！俺がその女をいじめた証拠は完全になくなったんだよ！！ほらどうする？どうやって俺のやったことだって証明する？お前らの負けだよ！！』

「何だこれ！？」

放送でさっきの話が流れて来ました。

「これなーんだ？」

そう言って取り出したのは何かの機械です。
あれって・・・

「もしかして盗聴器？」

「キャロちゃん正解。」

なんでそんなものが・・・

「しかし、こいつは本当にバカだったな！！好き勝手にペラペラ話してくれたおかげで証拠はバッチリ取れた。いい仕事だぜ相棒！！」

『これくらい問題ない・・・』

放送を流してるのは佐助君か！！

「さて、もうお前に逃げ場はないぜ。俺達以外に先生もあんたの親もこれを聞いてるだろうな。」

「くっくっく・・・」

「精々親への言い訳を考えておくんだな。お馬鹿さんな先輩。」

「くそおおおおお！！」

相手は怒りに身を任せてエローシュ君に殴りかかって来ました！！

「エローシュ君！！」

だけど、その拳はエローシュ君に届く事はありませんでした。

「ぐあつ!!」

夏穂ちゃんが自分より大きい相手をぶん投げていました。

「私、家が合気道の道場やってるのよ。アンタみたいな屑野郎をぶちのめす為にね。」

夏穂ちゃん言葉遣いが……

「サンキュー夏穂。さて、俺達はクソでバカな先輩が投げた真白ちゃんの大事なものを取りに行きますか。」

「でも、宝石は……」

投げ捨てられちゃって……

「問題無いさ。取り敢えず下に行こうぜ。」

そう言っただけでエローシュ君はみんなに下へ行くように指示を出します。

「馬鹿な奴だな、せっかく穩便に済ませてやろうと思ったのに……精々、自分の罪を悔やんでな。」

そう言い残して、エローシュ君も教室を出ました。

「エローシュ。」

下に行くとルーちゃんと上に居なかったクラスメイトがいました。

みんな泥だらけです。

「お疲れ、それで見つかった？」

「これ？」

そう言つてルーちゃんは蒼い宝石を見せました。

「これです！！本当に良かった……」

真白ちゃんは大事そうに宝石を握りしめています。

「本当にありがとう。」

「気にしないで。それとエローシュ、かつこよかったよ。」

そう言つてルーちゃんはエローシュ君の頭を撫でました。

エローシュ君は恥ずかしそうにされるがままになっています。

「けどすっかり汚れちゃったから、みんなにジューズね。」

「鬼ですか！？ルー様！！」

そのやりとりを見てみんなで笑い合いました。

「本当にみなさんありがとうございます！」

真白ちゃんはもう一度、頭を深々と下げ、みんなにお礼を言っています。

「何言ってるんだよ、真白ちゃんもクラスの仲間なんだ。気にすることないよ。」

真白ちゃんの頭を撫でながらエローシュ君が言いました。

「さて、相棒が帰ってきたらみんなで帰るか！あつ、それと……」

そこでエローシュ君が一旦話を切って、

「ミッションコンプリートだ！みんな、お疲れさま！」

その一声にクラスメイトみんなで返事をしました。

私、このクラスの一員になれて本当に良かったです！！

第3話 1年1組はとっても良いクラスです（後書き）

今回出た真白雫ちゃんが最後のメインのオリキャラです。

基本、オリキャラ4人とキャラQ、ルーちゃんが進んで行くと思います。

次はオリキャラの説明です。

それと、本編を知らない人にも読んでもらいたいので、本編のキャラの説明も投稿しようと思います。

本編を読んでいる人は読まなくて良いです。

これから本編同様によりしくお願いします！

オリキャラ紹介（前書き）

オリキャラ紹介です。

今回初めて容姿を他の作品の人物に当てはめてみましたが、こんな感じだと思ってくれればいいです。

オリキャラ紹介

エローシュ（江口伸也）

容姿　　普通。ボサボサの黒髪。

転生者。しかし、零治達とは違い、見習いの神様に転生させられた為、特典は無し。しかも自身は『リリカルなのは』の事を全く知らないし、神様にも教わっていない。

前世の知識を生かし、幼稚園では天才と言われていた。それゆえに子供っぽくないと、幼稚園では省かれていたが本人は全く気にせず、マイペースに過ごしていた。

しかし、あるきっかけで佐助、夏穂と仲良くなり、それ以来ずっと一緒にいる。

いつもは締まらないヘタレで変態のイメージがあるエローシュだが、仲間のためならどんなことでもする。その為、先生が尻拭いをするので、怒られたりもするが・・・

ただし、その分クラスメイトの信頼は厚い。統率力もあり、自身は運動があまり得意な方ではないが、その分周りを動かす。

自分をエロ紳士と言い、エロ紳士同盟を作り、その盟主。会員は1年から6年まで幅広い会員がいる。

ちなみに一応リンカーコア持ち。

「エローシュちゃう!」

小岩井佐助

容姿 バカテスのムツツリーニで髪が黒。

エローシュの親友。相棒とも呼ばれている。この歳で機械類にとても強く、盗撮するためのカメラや盗聴器まで色々な物を使いこなす。ただし、全てが長期出張中の父親の物。母親いわく、仕事で使うらしい。

それを勝手に使っている。

エローシュとの出会いは幼稚園。あるきっかけでエローシュと仲良くなり、それ以来ずっと一緒である。

エローシュがエロ本などでエロの素晴らしさを教えてからエロに執

着するようになり、エローシュと共に真のエロの道を探究している。
エロ紳士同盟ナンバー2。

ちなみに鼻血は出ません。

「僕に不可能の2文字は無い……」

千歳夏穂

容姿 けいおんの溼を小さくした感じ。ただし、性格は強気。

エローシュと佐助と幼稚園からの付き合い。

佐助同様に、とあるキツカケによりエローシュと仲良くなり、それ以来一緒にいる。

姉御肌で強気。クラスの信頼も高く、みんなの相談役。
それゆえ、お節介なところがある。

エローシュいわく、姉御肌でお節介は女戦士。

家が合気道の道場をしているため、彼女自身も合気道が強い。

普段はエローシュに厳しく当たるが、エローシュの事を大事に思っている。

1組の特攻隊長。

エロ紳士同盟の一番の危険人物。

「うるさいわよ、エローシュ！」

真白雫

容姿 S O 2のレナ。ただし、耳も普通で髪も少し青みかった黒。頭に月のアクセサリーを付けている。

性格は大人しく人見知り。それによりクラスに余り馴染めずにいた。上級生に苛められてる所をキャロが見つけ、それをエローシュ率いるクラスのみんなに助けられた事により、クラスに馴染むようになる。

クラスで唯一エローシュの事を名前で呼ぶ人物。

蒼い宝石を大事に持っており、それはなんなのかはまだ不明。親は母親しかいない。

「伸也くん、大丈夫？」

細野霧子先生

容姿 シティーハンターの冴子

1年1組の担任。

歳は24と、若いながら、ベテランの先生並の雰囲気を持つ。
エローシュにとって一番頭が上がない存在。

子供の主張を一番大事にする人で、その尻拭いを率先してやってくれる。

なお、シャイデとは飲み仲間で、飲みに行ったりする。

「やるからには徹底的にやりなさい！」

オリキャラ紹介（後書き）

こんな感じですかね。

これは現時点です。

なので真白ちゃんの説明が少なかったり、過去に何があったなどは謎のままです。

さて、次は・・・・・・・・考えてない・・・

まあ真白ちゃんを含めた6人のくだらない会話になると思います。

第4話 異端審問会ってなんですか？（前書き）

こんにちはblueoceanです。

今回は……特に何とも。

ほのぼの行きます〜

第4話 異端審問会ってなんですか？

「おはよう真白ちゃん。」

「おはようキャラちゃん、ルーちゃん。」

「おはよう。」

朝、登校中に真白ちゃんに会いました。
前の事件の後からとても仲良くなってます。

「今日は体育だね。」

「私、運動苦手なんだ……。」

真白ちゃん、どろけいの時もへ口へ口だったもんね……

「キャラはどう？」

「私は授業は何でも好きだよ。………国語以外。」

「そうだね、国語以外……。」

何であんな授業あるかな……

この前の朗読の時も何度も囁んじやって恥ずかしかった……

「漢字多過ぎるよね……。」

「これから先ずっと覚えるみたいだよ……。」

真白ちゃんからそう聞いて、私とルーちゃんは揃ってため息を吐きました。

「だ、大丈夫だよ。普段から使うからきつと覚えるよ。」

「本当かな・・・？」

「真白ちゃんの言うことは信頼できる。」

「ちなみに信用できないのは？」

「エローシュ。」

即答でした。

「そんなことないよ！！伸也君は信用できるよ！！」

「信頼は出来るけど信用は出来ない。」

ルーちゃんはエローシュ君の事となると辛口になります。

「そんな事無いよ！！伸也君は良い子だって！！」

そうだ、真白ちゃんはエローシュ君の事を伸也君と呼びます。
エローシュ君が名前なのにどうして・・・

・・・あれ？

「ふうん……」

そんな真白ちゃんにルーちゃんは近づいて耳元で何か言いました。
あつ、顔が湯でタコみたいに赤くなった。

「何を話したの？」

「秘密。」

ルーちゃんにご機嫌な顔で言いました。

うん、気になる……

そして、体育の授業……

「行くぞ！！俺のこの手が光って唸る！お前を倒せと輝き叫ぶ！必殺！！シャイニングファイ」さっさと投げる。「……………ゴメンナさい」

ルーちゃん相変わらず厳しい。

だけど、なんだろうな？光って唸る？魔法？

「コホン、気を取り直して……そりゃ！」

エローシュ君の投げたボールは私の方に飛んできました
でもこれくらいなら……

「……よし！」

しっかりキャッチ出来ました。

「くそつ、やっぱりあれくらいじゃ取られるか……仕方ない、
今度は本気を出す！！流派東〇不敗の最終奥義、石破ふべっ！？」

あつ、私の投げたボールがエローシュ君の顔に……

「す、すいません！大丈夫ですか！？」

「大丈夫よ、こいつはこれくらいじゃ倒れないわ。意外とタフなの
よ。」

夏穂ちゃんがそう言いますが、やっぱり心配です。

鼻血、出ていなきやいいんですけど……

「くつ、ハハハハハハハ！甘いわ！！それくらいのヒョロ玉で
は我を倒すことなど不可能！！」

エローシュ君は何事もなかったかのように立ち上がりました。

全然平気ですね。

「エローシュ君、顔面だからセーフ。」

「フハハハハ！次はこっこの番だ！！」

そう言つてボールを投げました。
さつきより速いです。

だけど………

「なっ！？」

エローシュ君も驚いています。

「遅い。」

ルーちゃんが簡単にキャッチしたからです。
流石ルーちゃんです。

「今度はコツチの番。」

ボールを右手に持って構えます。

「待つて、ルー！」

そう言つて夏穂ちゃんはルーちゃんに耳打ちをし始めました。

「それ面白そう。」

ニヤリとルーちゃんは夏穂ちゃんの言ったことに賛成したようです。

「それじゃあ……えい。」

ルーちゃんもボールを投げました。
ボールは真っ直ぐエローシュ君の顔に・・・

「ぎゃあ!？」

直撃しました。

「エローシュ君、顔面だからセーフ。」

先生がそう言いますが、当の本人は痛くて直ぐに動けません。

「えいつ!」

相手の女の子が投げたボールを夏穂ちゃんがキャッチ。

そして・・・

「行くわよ、エローシュ!」

「えっ?」

そう言つてこつちを向いたエローシュ君の顔面にボールが真っ直ぐ・

「ぎゃあ!？」

直撃しました。

「エローシュ君、顔面なのでセーフ。」

「痛てえ・・・」

本当に痛そうにしています・・・
ちよっとかわいそうになってきました。

「行くよエローシュ！」

敵のボールをキャッチしたルーちゃんがすかさず、エローシュ君の顔面目掛けて投げました。

その顔が笑顔だったのは気にしないことにします・・・

「あぎゃあ!!」

「エローシュ君、顔面なのでセーフ。」

先生も無慈悲です・・・

「まだまだ!!」

そう言つてまた夏穂ちゃんがボールを投げました。

しかし、そのボールはエローシュ君の顔から外れ、右肩に当たりました。

「しまった!?!」

2人は声を揃えて言いました。

しまったって・・・

でもこれでエローシュ君も・・・

「・・・・・・・・セーフ。」

救われませんでした・・・・・・・・

佐助君が見事にダイビングキャッチ。

これによりエローシュ君、セーフです。

「俺は助けてくれてこんなに怒りを抱いたのは初めてだよ・・・・・・・・」

でしょうね。

佐助君がこっちを向いてVサインしている辺り、確信犯だと思います。

そして、その後もエローシュ君の地獄は続きました・・・・・・・・

お昼休み・・・・・・・・

「全く、酷すぎるだろお前ら。」

「ごめん、やり過ぎた。」

「まあ、たまには良いじゃない。」

「そのたんびに傷だらけになる俺って・・・」

「ドントマインド、エローシュ君。」

「キャロちゃん、何で略さないの!？」

ちょっとした気分です。

「クソっ、グレてやる・・・」

そう言って後ろを向いて黙々と食べ始めました。

流石にちよつとからかい過ぎたかな・・・

「エローシュ、これあげるから機嫌直して。」

ルーちゃんが珍しくエローシュ君に優しくしてます。

「べ、別にそんなに許してもらえるなんて思っなよ・・・」

と言いながらも嬉しそうです。

「って、ご飯じゃねえか!!ご飯なら一杯あるんだよ!!」

「それじゃあ交換でこれもらっね。」

そう言っつてルーちゃんは唐揚げを取りました。

「あっ、また!？」

「じゃあ私も、ハイ。」

「ってまたご飯!？」

「私も唐揚げもらうわ。」

「止めてくれ!!また俺のおかずが・・・」

「僕も・・・」

「相棒!!流石に取りすぎだろ!?!ソーセージと卵焼きのダブルとか鬼畜すぎる!!」

「私はこのグラタンを・・・」

「キャラちゃんまで・・・」

私もご飯とグラタンを交換しました。

「伸也君、私のおかず分けてあげるから・・・」

「ああ・・・ここに女神様があるわ・・・」

泣きながら、真白ちゃんにお弁当のおかずを分けてもらっエロージユ君。

真白ちゃんも嬉しそうだ。

「・・・・・・・・・・フン。」

けれど、そんな様子を見ていた夏穂ちゃんは何だか不機嫌そうです。

「面白くなりそう……」

「どうなるんだろうね……」

佐助君とルーちゃんは2人で何やら話しています。

あれ？

私だけ仲間外れな気が……

放課後……

「何でエローシュ君、磔にされてるの？」

「というかどこからあんなもの出したの？」

私とルーちゃんがトイレに行っている間にエローシュ君が十字架に磔にされていました。

「あわわ、どうすれば……」

「真白ちゃん、一体何があったの!？」

「あっ! キャロちゃん、ルーちゃん!！」

私たちに気づいた真白ちゃんが慌てて近づいて来ました。

「あのね、私がエローシュ君にこの前のお礼として作ったミサンガを渡したら、それを見ていた男子のみんながあっという間に大きな十字架にエローシュ君を……」

何か色々と突っ込まなくちゃいけない気がするけど、取り敢えずエローシュ君が先だね……

「ルーちゃん……」

「面白そうだから傍観しよう。」

「「ルーちゃん!？」」

まさかの傍観!？

「それでいいわよ。」

「夏穂ちゃん!？」

いつの間にか後ろにいた夏穂ちゃんが言いました。

「エローシュは普通の人より頑丈……」

その隣にいた佐助君もそう言います。

それは体育の時間に聞きましたが・・・

でも、付き合いが長い二人が言うなら大丈夫かな・・・

「只今から異端審問会を始めます。」

そう宣言して、磔されているエローシュ君の前にいる男の子達は頭に黒い頭巾を被り始めました。

「被告、エローシュ。貴殿はエロ紳士同盟を作りながらもリア充になろうとしていた。盟主自ら盟約を破った行為は我ら同盟の裏切りに値する！！・・・何か言いたい事はあるか？」

「俺のどこに盟約に違反した証拠がある！！証拠の提示を要求する！！」

「ではこれはなんだ！？」

そう言って裁判官？をしていた男の子がミサンガをエローシュ君に見せてきた。

「それは真白ちゃんからお礼として貰ったものだ。そのどこに違反がある！！」

「女の子から贈り物、それはリア充の仲間入りの意味を示すって兄貴が言っていた。だから違反だ！」

「それはお前らが俺に勝手に嫉妬しているだけだろうが!!」

「……………うつ……………」

「それに俺が作った盟約にはそんなものは無い!!」

「でも理不尽だ!!俺たちも手伝ったのに、俺たちには何も無いなんて……………」

「……………そうだ、そうだ!!……………」

「それは……………日頃の行いが悪いからだ。」

「……………お前にだけは言われたくない!!……………」

その気持ちは分かります。

「あ、あの!!」

真白ちゃんは精一杯大きな声を出して、異端……………なんだっけ？

と、とりあえず話しかけました!!

「皆さんにもお礼があります!クッキーですけど要りませんか？」

「……………いりま〜す!!……………」

みんな被っていた頭巾を取って、真白ちゃんの所へ群がって来まし

た。

変り身が早いですね……

「キャロちゃん達もどう？」

「ありがとうございます！」

「美味しそう。」

「本当ね。」

「良いお嫁さんになれる……」

「えへへ……」

「おい、誰か俺を下ろしてくれよ!!」

私達はみんなで真白ちゃんのクッキーを美味しくいただきました。

「ね、その頭巾って何なの？」

クッキー食べている時に近くの男子に聞いてみました。

「えっとね、僕の兄貴がやってるんだけど、SBS団ってやつ你真

似事。何でもリア充の零治って人を懲らしめるために組織したんだって。」

お兄ちゃんの名前と同じですけど違いますよね？

第4話 異端審問会ってなんですか？（後書き）

SBS団みたいなものがこの学校にも……

けれど、零治達の方よりは過激じゃないです。

SBS団……

原作介入した神崎大悟が作った組織。

バカテスのFFF団だと思ってくれば良いです。

零治は相当恨まれてます。

次もよろしくお願いします。

第5話 エローシュ君のライバル？登場です（前書き）

こんにちはblueoceanです。

今回は運動会の前の話。

エローシュのライバル？が登場します。

第5話 エローシュ君のライバル？登場です

「運動会ももうすぐね・・・」

夏穂ちゃんが自分の卵焼きを食べながら呟きました。

いつも通りの昼休み。

私達は中庭で円になってお弁当を食べていました。

運動会も、もう今週。

お兄ちゃんたちより先にやります。

初めてだし緊張します。

「体育もその行進とかで面倒だよなあ・・・何度も繰り返すからやんなるよ。」

エローシュ君の言うことも分かります。

何度も行ったり来たり。

私も正直うんざりです。

「それよりエローシュ、二組からこんなものを受け取った・・・」

そう言って佐助君が折りたたまれた紙をエローシュ君に渡しました。

一体何だろう・・・

「はあ……懲りない奴だな。」

「何よ一体……」

そう言った夏穂ちゃんにエローシュ君は紙を渡しました。

「なるほど……面倒ね。」

「一体何なんですか？」

私は我慢しきれなくなったので聞いてみました。

「ああ、転校してきた二人は知らないよな。真白ちゃんも直接関わって無いから知らないかな？」

そう言うって私達に手紙を見せてくれました。

『今回の運動会で決着を付けるぞエローシュ！！勝った方が夏穂さんをいただく！！』

エローシュに対しての果し状でしょうか？

でも、『夏穂さんをいただく』っていうのは……？

「これを渡してきたのは西條清孝。隣のクラスの金持ちなんだけど、いつの間にか夏穂に惚れたらしくて、何故か俺を目の敵にしてくるんだよ……」

「エローシュのライバル？」

「俺はそう思っていないんだけど、相手の方は思ってるらしくて・・・
・一回負かせただけだしつくくてしつくくて・・・」

「夏穂ちゃんは告白されたの？」

真白ちゃん直球です。

「されたけど断ったわよ！！誰があんなキザでドリル男・・・」

ドリル男？

「だけど玉の輿。」

「そんなの関係ないわ！！実際に会ってみれば3人も分かると思うわ。エローシュが可愛いくらいよ。」

「俺と比べるなよ！俺が可哀想だろ！」

「否定できない・・・」

どれだけ嫌われてるんでしょうか・・・
何だか少し可哀想です。

だけど・・・

「断ったのにしつこいのはある意味嫌ですね。」

「そうよね・・・何であんなにしつこいのかしら・・・」

「夏穂ちゃんって結構モテるよね。」

真白ちゃんが不意にそんな事を言いました。

その時、エローシュ君の目が光ったのを私は見逃しませんでした。

「真白ちゃん詳しく教えてくれ!!」

エローシュ君が真白ちゃんに身を乗り出し聞いてきます。

「え、えつとね、今朝も下駄箱に……」

「言っちゃダメ! 零!!」

「いいこと聞きましたな。」

「重用情報……」

エローシュ君と佐助君はニヤニヤしながらそんな事を言いました。
さっきの話の先が分かったのかな?

「ルーちゃんは分かった?」

「キャラは分からなかったの!？」

あれ? 驚かれる事かな?

「キャラ、今度漫画貸すから読んで。」

「えっ!？あ、ありがとう……」

勢いよく言われたので断る余裕もありませんでした。
まあ断る理由も無いのですが……

「夏穂さん!!」

放課後の事です。

今日も授業が終わり、帰りの支度をしていた時でした。

後ろのドアから夏穂ちゃんを呼ぶ声が聞こえたと思って見てみたら、白いスーツを着て、頭をトンガリにして固めた男の子がいました。

立派なドリルです。

「今度の運動会で僕の素晴らしさを見てもらい是非、結婚を前提としたお付き合い……」

と、そこまで言って固まりました。

あれ？私が見られてるような……

「あ、あなたお名前は……」

「えっ！？私ですか!?!」

「そうです……」

「あ、有栖キャラですけど……」

「ぐおっ!？」

そう言うどドアにもたれ掛かってそのまま床にズルズルと倒れていきました。

ああ、白いスーツにホコリが……

「可憐だ……」

「えっ!？」

「何て可憐なんだ!!是非僕と結婚を前提としたお付き合いを……グフォ!？」

そこまで言うと、飛んできたランドセルが顔面に当たり、後ろに倒れました。

「キャラは渡さない!-!」

「ルーちゃん、やりすぎ!」

投げたのはルーちゃんでした。

流石にやりすぎじゃ……

「誰だい、こんなものを……」

あれ？案外平気でした。
簡単に立ち上がります。

そうして、今度はルーちゃんを見て固まりました。

「妖美だ……」

あれ？何かまた同じ光景を見ているような……

「何て妖美なんだ！！失礼ですがお名前は……」

「お前に名乗る名前なんてない。」

ルーちゃんは即座に教えるのを拒否。

「素晴らしい、これがツンデレと言う奴なのか？このクラスは本当に素晴らしい子ばかりだ！！」

絶対に違うと思いますが……
何だか危ない気がします。

「何なのこの気持ち悪いのは……エローシュより酷い。」

「エローシュと言ったか！？クソつ、またしても奴か！！だが恋は障害があつたほうが燃える！！今度の運動会での僕の活躍、とくと見ていてください！！」

そう言ってハッハッハと笑いながら消えるドリルの男の子。

結局何だったのでしょうか？

「何考えてるのかしらアイツ・・・」

「2人共、あれが昼休み話していた奴よ。」

「えっ、彼がですか!？」

確かにおかしい人でした。

夏穂ちゃんが言うだけあります・・・

「エローシュ以上の変態を見たのは初めて。運動会前に闇討ちしようかな・・・」

「駄目ですよ、ルーちゃん!! 夏穂ちゃんも『その手があったか!』って顔しないでください!!」

2人共暴力は駄目です!!

「3人共どうしたんだ？」

そんな時、エローシュ君が真白ちゃんと教室に帰ってきました。

「へえ、俺たちが日誌を渡しに行く間にそんなことがあったのか・・・」

「そうなんですよ……」

さっきの出来事をエローシュ君に話しました。
真白ちゃんも私達と同じ気持ちみたいです。

「アイツは……さて、これはどんなことをしても負けられなくなっただけ。」

えっ、何で!?

「そこまでの事じゃ無いと思う。」

私もルーちゃんの意見に同意します。

「ダメだな。ああいう奴は一回勝つと、勝手にした約束を本気に思っ
て、更にしつこくなるぞ。」

「そうなんですか!？」

「ああ、だからウチのクラスのマスコット、キャロちゃんとクール
ガール、ルーちゃんは俺達を守らないと。」

「いつの間に変なあだ名を……」

ルーちゃんも流石に驚いていますが、案外嬉しそうです。

マスコットか……

トッキー？

いや、私は女の子ですからトッキーですね。

あんまり嬉しくない……

「何でキャラちゃんに睨まれてるのか分からないけど、明日はみんなで会議だな。」

「で、どうするのよ。」

「取り敢えずどの競技も絶対に勝たせない。それが最低条件だな。まあ対策は相棒と作戦を練っておくよ。」

「先生に迷惑をかけないようにしなさいよ……」

「むしろ、もつとやれ！！って言われそうだけど……」

この前私とルーちゃんも実際に見たのですが、担任の細野先生と隣のクラス（ドリル頭の男の子のクラス）の担任のはげ山……オホン。

竹山先生は犬猿の中らしいです。

私達が見た場面は嫌味を言い合ってる場面でした。ものすごく大人げなかったです。

帰ってきてから細野先生は最初の授業の5分をずっと愚痴ってました。

要するにそれほど毛嫌いしています。

「まあ俺に任せてくれ。」

エローシュ君は頼もしく言い切りました。

今度はどんなことをするのか楽しみですが、本当に必要なのかな？

夜………

「みんな、出来たわよ」

星お姉ちゃん呼び声にみんなが動き始めます。

「ライお姉ちゃん、ご飯だつて……」

「ちょっと待つて！今重要な所！！」

確かに今重要な所です。

タ〇ガース対ス〇ローズ、六回表で2 - 1、タ〇ガースリードですが、ピンチです。

1アウトランナー1塁3塁でス〇ローズの4番畑山です。

私はライお姉ちゃんと、タイガースのユニフォームと帽子、メガホ

ンを持って応援しています。

「ここで誰が出てくるかな？」

「私は江原辺りだと思っんですけど・・・」

相手バッターは右バッターなので左ピッチャーをぶつけると思うのですが・・・

でも今年の左の中継ぎはあんまり成績が良くないので不安です。

今日の試合は負けると4位になるかもしれない試合なので絶対に負けられません！！

『えつとピッチャーを変えるようです・・・おっ！？ここで怪我で調整中だった、筒居をマウンドに上げてきました！！』

「キャロー！！」

「はい！！筒居なら絶対に抑えてくれます！！」

筒居は左の先発の柱です。

本当はローテーションの中でチームを引っ張る筈だったのですが・・・

シーズン序盤にケガをしてしまい、今日までずっと2軍にいました。

でも帰ってきてくれて本当に良かったです！

「あつ、CMに入ったね。それじゃあご飯食べながら見よう！」

「はい！」

「お前ら……」

「あ……」

「準備くらい手伝えー!!」

「ごめんなさーい!!」

お兄ちゃんにこつてり怒られてしまいました。

けれど、筒居が見事に抑えてくれてタOガースは勝てました。

本当に良かったです！

「そういえば、フェイトから聞いたんだが、エリオが運動会見に来るらしいぞ。」

ご飯を食べ終え、くつろいでいたら、お兄ちゃんが不意に言いました。

「本当ですか!？」

夏休みの別荘へ行って以来会っていないのでとても楽しみです！

……そういえば、

「エリオ君は学校には行かないのですか？」

「エリオは管理局に入隊するつもりらしいぞ。」

「そうなんですか……」

一緒に行けたら楽しそうだったんだけどなあ……

「まあエリオにも目標があるんだよ。応援してやろうな。」

「はい!!」

一方、アルピーノ家……

「よっし、ここで畑山が打てばジャ○アンツが3位に……」

「そんな事させない……」

ゼストはジャ○アンツファンだ。

あの金持ちチームのどこがいいのか分からない。

確か、小松原が粹で良いって言ってたけど……

「私にも負けられない戦いがここにある!」

「ふっ、言つようになつたなルー!!」

「どうでもいいけどご飯よ二人共。」

そんな2人をテーブルのイスに座つて呼ぶメガー又さんの姿があった。

「くっ、これでジャロアンツが4位か・・・」

「ふっふっふ、これぞ虎の底力。」

「ルー、こぼしてるわよ。」

「・・・ごめんなさい。」

注意されて私は自分のこぼした夕食を拾う。

「お茶のおかわりはいかがですか？」

「ああ、もらおう。」

お母さんはゼストの湯飲みにお茶を入れる。
こつ見ると夫婦にしか見えないんだけどな・・・

一体いつになつたら結婚するのだろう・・・

「ルー、あなたは？」

「豆乳頂戴。」

「はいはい。」

少し苦笑いしながら私に豆乳を入れてくれた。

いいじゃない、豆乳好きでも……

「ガリユー、これお願い。」

コクっとうなづいて、空になったお皿をキッチンに運んで行き、

「……………」

お皿を綺麗に食器洗浄機に入れ始めた。

「いつもありがとうガリユー。」

「……………」

無反応みたいに見えるけど、気にするなと言っていると思う。

本当はゼストがやるって言うていたんだけど、食器洗浄機の使い方がイマイチ分からなくて、結局ガリユーにやってもらってる。

ガリユーは何でも出来るからね。

「そついえばルー、もうすぐ運動会よね？」

「そつだよ。」

「お母さんとゼスト隊長も見に行くから頑張つてね。」

「うん、頑張る。」

「ただあのドリルには気を付けないと……」

「後、当日エリオ君も見に来るらしいわよ。」

「エリオ来るの？」

「零治君がそう言ってたわ。ねえ、どんな子？」

「どんな子？えつと……」

「とても真面目で恥ずかしがりや。優しく、結構イケメンで、将来はモテモテの予感。だけど女性関係はレイ兄と同じになりそうな気がする。」

「えつと……」

「どこから突っ込めばいいのか……」

でも私の考察は間違っていないと思う。

「ま、まあ仲良くね。」

「うん。」

クラスの女子に紹介してみようかな？

そうしたらエリオが男子に殺されちゃうか。

だけど、逆に返り討ちにしようだな……

その後もルーテシアはエリオが来たとき、どうするか考えていたのであつた。

第5話 エローシュ君のライバル？登場です（後書き）

こんな感じでエローシュがまたやらかします。

と言っても前みたいに大掛かりな事ではありませんが・・・

それと、エリオにも軽くフラグを。

何のフラグが分かりますと思います。

次もよろしく願いします。

第6話 運動会です！（前編）（前書き）

こんにちはblueoceanです。

長くなりそうだったので、分けました。

それではどうぞ・・・

第6話 運動会です！（前編）

「ふあゝあ……」

私は大きく背伸びをして、ベットから出ます。
時刻は6時30分。ちょっと起きるのが早かったですね。

「いい天気。」

カーテンを開けると、お日様が上がっていました。
今日は晴天みたいです。

「今日は頑張るぞ……」

私は静かに気合を入れました。

「じゃあ応援に行きますから頑張ってください。」

「はい、行つてきます!!」

私はみんなに見送られ、家を出ました。

今日はエリオ君だけじゃなく、管理局で忙しいフェイトさんも来てくれるみたいです。

桐谷さん達も来てくれると言ってましたし、かなり大勢です。ただそれがまた嬉しかったり……

「おはようございま〜す!~!」

「おはようキャロちゃん。ごめんね、ルーまだ準備が終わってなくて……」

「大丈夫です、いつものことですから。」

「それが困ってるんだけど……」

メガーヌさんが申し訳なさそうに言います。

別に気にしないのですが……

ちょっと奥を見ると、ガリユーさんが慌ただしく動いてました。

ルーちゃんが言うには、最近は主夫が板に付いてきたって言うてました。

それでいいんでしょうか……

「おまたせ。」

「うん、それじゃあ行こう!」

ルーちゃんが来たので、私達は学校に向かいました……

教室に来てみると、既にエローシュ君と佐助君が来ていました。

何やら、紙を見て、話し合ってます。

「おはようございます。」

「おはよう。」

「ああ、おはよう二人共。」

「おはよう……………」

「早いですね二人共。」

「ああ、最終確認をしている所だからな。だけど問題は……………」

「玉入れと綱引き……………」

問題……………？

「何かまずいの？」

「ああ、この二つはクラスで競うだろ？実は2組は運動神経いい奴が多いんだ。」

そう言つて一枚の紙を見せてきました。

どうやらスポーツテストのデータの比率みたいです。

「2組凄いですね。」

「それに比べて1組は低い・・・」

「インドア派ばかりだからな・・・」

インドア派の意味は分かります。

確か・・・家にずっといる人だったはずです。

「一応対策はある・・・」

「だけど、それがうまくいくかは相手次第・・・」

要するに不安つて事ですね・・・

「大丈夫。」

「ルーちゃん？」

「こつちには強い味方がいる。」

「「味方？」」

「エリオ。」

・・・・・・・・えっ？

「無理だつて！！そんなのバレるよ！！」

私達はエリオ君を見つけて、校舎裏に連れてきました。

「お願い、エリオの手を借りないとまずいかもしれないの。」

「だけど、僕はこの学校の生徒じゃないんだよ！！絶対にバレるって・・・」

「大丈夫、エリオはかっこいいから問題ない。」

「大有りだよー！！」

ルーちゃんがいい考えあるって言うていたので何か考えがあると思っ
てましたが、無計画でした。

「仕方ない、それじゃあ変身魔法で……」

「そんな魔法ありましたっけ？」

「……知らない。」

「知らないのに言っただの!？」

ダメそうですね……

「もう、つべこべ言わず、来る!！」

そう言っただけでルーちゃんが無理やりエリオ君を1組の教室へ連れて行ってしまいました。

本当に大丈夫かな？

その頃、フェイト達は……

「零治、エリオが居なくなっただの!！」

「えっ!?! 迷子か？」

「多分……お願い、探すの手伝って!！」

「分かった。」

エリオを探して、走り回っている中学生組がいた……

「皆に紹介する、エリオ・モンデヤル君だ!!」

「モンデヤルです!!」

「最低……」

「ちょっと!? 女子の皆さん、そんな冷たい目で俺を見ないで!!」

自業自得です。

「オホン……で、このモンデヤル君が助っ人として手伝ってくれることになった! ルーちゃんが言うには運動神経はルーちゃんよりもずっと上で、しかもイケ……」

あれ? 何か顔が暗くなったような……

「イケメン……」

そう言って崩れていきました。

「確かに・・・」

「かつこいいよね・・・」

「目もキラっとしてるし・・・」

「ジャーズみたい・・・」

女の子達もヒソヒソと話しています。

ちよつと嬉しそうです。

「クソっ、イケメンとか……」

「それで運動神経抜群……？」

「モテ男じゃないか……」

逆に男子のテンションが下がってるような気がします。

「と、とにかく！団体競技の時に出てもらう！そうすれば、運動神経抜群もとい、脳の２組の連中にも負けはしない！！それにこっちには仕込んだ策もある！！恐れず立ち向かえ！！」

「おーっ！！」

「よし！！今日は絶対に勝つぞ！！」

こうして、エリ才君の団体競技の参加が決定しました。

「それじゃあみんな、初めての運動会だから緊張してるだろうけど頑張りうー！ただ、玉入れと綱引きは作戦通り頼むな。」

「OK、エローシュ！」

「よし、やあつてやるぜえ!!」

気合バツチリです！！

「ただ、逆に目立ちすぎてちょっと恥ずかしいですけど……」

零治SIDE

「何か妙に気合入ってるな。」

「そうですね、初めての運動会とは思えない気合を感じます。」

確かに星の言うとおりだな。

円陣組む一年生を初めて見たぞ俺……

「確かにキヤロの言ってた通りだね。」

「そうだな、我もここまでとは思ってなかった。」

ライや夜美も同じみたいだな。

「だけど楽しそうだな。」

見ていたフェリアが不意にそんな事を言う。

「そうですね。」

「そうだね。」

「だな。」

俺も同意見だ。

キャラはとても和かにクラスの仲間と話している。

ルーは・・・何か男の子にちょっかい出してゐるな。

「まあ楽しそうで何よりだよ。」

俺の言葉に星達4人は頷いたのだった。

零治SIDE END

「先ず第一関門だな。」

エローシュ君は真面目な顔で呟きました。

一年生綱引き。

最初の方でいきなりです。

他のみんなも顔つきが変わりました。

ちなみに作戦は単純なもの。

団結力で勝負との事です。相手は確かに個々の運動神経はいいのですが、余り仲が良くないらしいです。

綱引きはみんなで協力してやる競技です。

『ここは俺達の団結力で相手を倒す!』

シンプルですがいい作戦だと思います。

「いいか！掛け声を合わせるんだ！！俺達は個々の力は弱いが団結力はどの学年にも負けないと思う！！俺達の力を見せてやろうぜ！！」

「「「「「「「「「「「「OK、エローシュ!!」」」」」」」」」」」

流行りでしょうか？

何故か今日はこの掛け声をします。

「頼むぜ、秘密兵器・・・」

「本当に大丈夫かな・・・」

「いい加減覚悟を決めるべき。」

ルーちゃんはそう言つてエリオ君の背中を叩きました。
エリオ君は痛みで咳き込んでます。

ちなみにエリオ君は杉山君の体育着を借りてます。帽子も深く被っているので分からないと思うのですが・・・
杉山君とそこ両親には既に了承済みらしいです。

場所が一番前。

その横に私で、後ろにルーちゃん、その横にエローシュ君です。

ご両親まで話をする辺りは、流石エローシュ君です。

「頑張ろうエリオ君。」

私はエリオ君の背中をさすりながら言いました。

「ありがとう、キャロ。」

そう言つて笑顔で返してくれました。

えへへ・・・
ちょっと恥ずかしいです。

でも後ろの女子から睨まれてる感じがしますが、気のせいですよね？

「それじゃあ、よい……」

パン！！

ピストルの音が鳴り、一斉に引き始めます。

うわっ！？強い……

「行くぞ！！オーエス！オーエス！」

エローシュ君の号令に皆が合わせます。

だけど……

「動かない！？」

綱はびくとしません。

あつちはコッチよりバラバラなのですが、それでも綱は動きませんでした。

「エローシュ、このままじゃまずいわよ！……」

夏穂ちゃんの焦った声が聞こえてきます。

確かに不味いです。

コッチは力の無い分、チームワークで補っていますが、元が低い分、長く持ちません。

このまま長期戦になれば、こっちが不利です。

「分かってる！！みんな頑張ってくれ！！」

そう言っただけまた掛け声を上げます。

でもやっぱり綱は動きません。

「くそ、このままじゃ・・・」

流石のエローシュ君も予想外だったみたいです。

「・・・仕方ないか。」

エリオ君？

「ビリっとするかもしれないけどごめんね・・・」

エリオ君は何を言ってるのでしょうか？

すると・・・

「痛っ！？」

相手の先頭の子が痛がって綱を離しました。

「今だ！！」

エローシュ君の声に皆が反応しました。

一斉に綱を引きます。

中心のリボンは私達の陣地へ入っていき・・・

パンパン！！

終了のピストルが鳴りました。

「勝者、1組！」

それを聞いて、

[illegible]

皆で一斉に叫びました。

その後の綱引きは直ぐに負けてしまいました。

さっきの戦いで力を使い果たしたみたいです。ただと誰一人悔しがってる人はいませんでした。

そして、私とルーちゃんは気になった事があるので、人気のない校舎裏にエリオ君を連れてきました。

「エリ才君、一体何をやったの？」

「ああ、前に少しだけ電気を流したんだ。」

「えっと、魔力変換資質・・・でしたっけ？」

「うん、そうだよ。」

どうやらエリオ君は相手の一番先頭の子に電気を流したらしいです。

だからあの時、綱を離したのか・・・

「けれどよくやった、エリオ。」

そう言つてルーちゃんはエリオ君の頭を撫でました。

「やっぱりエリオが居てくれて助かった、ありがとう。」

「べ、別に僕は出来る事をしただけだから・・・。」

エリオ君は少し照れながら言いました。

だけど、実際にエリオ君が居なかったら負けていたかも・・・

「ありがとうねエリオ君。」

「キャラまで・・・つてそれより行かなくていいの？徒競走直ぐだつて書いてなかった？」

「あつ、そういえば！！」

「そうだ、キャラ行こう。エリオ、また後で。」

「うん、頑張つて二人共。」

私達は急いで1組に戻りました。

「エローシュ君……」

エローシュ君の同じ順番にドリル君がいます。

エローシュ君は運動は得意な方では無いので心配です……

「夏穂ちゃん、あのドリル君って運動出来るの？」

「エローシュよりは出来ると思うわ。」

真白ちゃんが夏穂ちゃんに質問しました。

結果は最悪ですね。

一体どうするのでしょうか。

そう思つてるとエローシュ君の番が回ってきました。

すると、エローシュ君はいきなり座り込みました。
どうしたのでしょうか？

「おいエローシュ、一体どういつつもりだ!？」

「これでいいんだ。いいから構えろよ。」

「ふん、その分だと勝負を諦めたみたいだな。」

「さあ、どうかな・・・」

ニヤリとエローシュ君は笑いました。

そして右足を後ろに伸ばし、両手を地面に付けました。

「失望したよ。僕のライバルの君がそんな変な格好をするとは・・・
・だけど、容赦はしないよ。『いつ何ときでも力を抜くな。』それが家の家訓だからね。」

嫌な人ですね・・・

何でエローシュ君は言い返さないのでしょうか？

「位置について・・・」

そうこうしているうちに始まるみたいです。

「よっい・・・」

パンー！！

ピストルの音と共に一斉にスタートしました。

「なっ！？」

ドリル君が驚きの声をあげました。

何故なら……

「行つくぜー!!」

エローシュ君が先頭だからです。

結果、エローシュ君は見事1位でした。

「何でお前が1位なんだ!! フライングしたんじゃないのか!？」

私が走り終わると、ドリル君がエローシュ君に対して怒っていました。

あつ、ちなみに私はぶっちぎりの1位です。

……ごめんなさい、何とか1位です。

「フライングしたんだろう！！そうに違いない！！じゃなかったらあんな変な格好だったお前に負けるはずが無い！！」

もう言いたい放題ですね。

………かつこ悪いです。

「もううるさい、行こうエローシュ……」

そう言っただけエローシュ君を連れ出したのは佐助君です。

いつも余り感情を出さない彼ですが、相当頭にきてるのが分かります。

まずいと思ったのか、ドリル君は後を追いかけてませんでした。

「くそっ……あつ、キャロさん、ルーさん、夏穂さん！」

私達に気がついたみたいでこっちに来ます。

「どうでした？僕の活躍。」

どの口が言うのでしょうか。

2人も思っただけと同じみたいなので、3人一緒に……

「……最低！！」「」

と言っただけでした。

ボケっとしてるドリル君を見て気分がよかったのは内緒です。

第6話 運動会です！（前編）（後書き）

今回出ませんでした、次には出る本編キャラの説明を軽く・・・

加藤桐谷

ゴールデンウィークにこっちに転生した、前の世界の零治の親友。

佐藤加奈

桐谷と同じ、ゴールデンウィークにこっちに転生した。前の世界だと零治の妹。

ダメっ子3シスターズ

セイン、ノーヴェ、ウェンディからなる3人。

本当に軽いですが、まあちょこっとくらいしかでないと思うので問題無い筈・・・

次もよろしくお願いします。

第7話 運動会です！（後編）（前書き）

こんにちはblueoceanです。

まず始めに今回出てくる本編キャラ、加藤家を軽く説明。

加藤桐谷

零治の転生前からの親友、零治を追って、こっちの世界に転生してきた。

佐藤加奈

零治の転生前の実の妹。桐谷と同じ時期に兄を追って、こっちの世界に転生した。

セイン

数の子の6番目。ダメっ子3シスターズが一番上。
天然であり、時に大事な事をポロっと言ってしまったりする。

ノーヴェ

数の子の9番目。ダメっ子3シスターズの真ん中。
少し暴力的で、コーヒーが大好き。3シスターズのツッコミ担当。

ウェンディ

数の子11番目。ダメっ子3シスターズが一番下。

ナンバーズ1の問題児。やることの殆どに厄介事が付いてくる。
はやての事を姉御と呼ぶ。

とこんな感じですね。

ちなみに加奈は今回出ません。

訳は一応ありますが、別に番外ではメインで出ることも無いので説明しません。

それではどうぞ

第7話 運動会です！（後編）

さあ、お昼ごはんもお兄ちゃん達と食べ終え、後半です。

後の競技で2組と直接当たるのは玉入れとリレーだけなので、エロ―シユ君は余裕です。

よほど、いい考えがあるみたいですね。

「よし、玉入れの作戦は以上！みんな最後まで気合入れていこうぜ
」！

「「「「「「「「「「「「OK、エロ―シユ！！」「「「「「「「「「「

「よし、やあ〜ってやるぜ！！」

今回もやっぱりこの掛け声みたいです。

零治SIDE

「やばっ、あのエロ―シユって奴かっこいいっス！！」

興奮してウエンディが騒ぐ。

「やあ〜ってやるぜ！！！！か？」

「そうっス！！ノーヴェ、あれいっすよね」

「まあな、悪くないと思う。」

ウェンディとノーヴェはどうやらあの掛け声を気に入ったようだ。

「ねえレイ？」

「どうしたセイン。」

「エリオ君どこいるの？」

「エリオは……」

確か、帽子を深く被った杉山だったわけ？

「あ、あそこだ。」

そう言っただけ俺は指さした。

エリオは緊張してるのか、動きが固い。

「本当だ！あはは、動きが固い！！」

エリオを見つけたセインはエリオの様子を見て笑う。

「え、エリオ大丈夫かな……」

アワアワと慌てるフェイト。

何か孫を見ているお祖母さんみたいだ。

声に出したらただでは済まないと思う……

「おっ、始まるっスよ！」

ウェンデイの言っていた通り、校庭にいる１年生はスタンバイし終わっていたみたいだ。

校庭に緊張感が漂っている。

『よい……い。』

パン！

ピストルの音が鳴り、玉入れが始まった。

零治SIDE END

「よし、作戦通りにみんな頼むぞ！！」

今回のエローシュ君の作戦はこうです。

『まずは投げる組と集める組に分ける。投げる奴はソフトボール投げの成績が良かった奴とキャロちゃん、ルーちゃん、エリオ。この三人だな。後の皆はひたすら玉を集めて投げる奴に渡してくれ。そっちの方が効率よく出来る。』

パン！

ピストルの音が鳴り、私達はそれぞれの役割の為に動きました。

『投げる奴は玉入れに書かれているサークルとカゴの半分位の距離から投げてくれ。それとボールは絶対に拾わなくていい。拾うのは拾う係の奴に任せて、投げることだけ集中してくれ。』

私は言われたとおり、ちょうど中間の辺りに行きました。

「はいキャロちゃん。」

真白ちゃんにボールを渡され、準備完了です。

「よし、阪〇ファンの底力みせたる！！」

私は慣れない関西弁でカゴに向かって言いました……………

零治SIDE

「見事な統率だな……………」

フェリアが驚きながら呟いた。

というより、ここにいるみんなが驚いていると思う。

何故なら……

「投げる係！！休まずひたすら投げまくれ！！誰か！！加納の所がボールが無くなってる、補充を！！」

キャロにエローシュと呼ばれている男の子が皆に指示を出し、それに皆がキチンと従っている。

その動きに誰もが迷いの無い。

「こんな一年生がいるのだな……」

「ええ、流石にこれは驚きね……」

夫婦（まだだけど……）仲良く並んで見ていた、ゼストさんとメガーヌさんも驚いている。

そしてそれ以上に……

「キャロとルー、何であんなに投げ方が綺麗なんだ……？」

「分からない……」

桐谷が驚きながら俺に聞いてくる。

2人はとても綺麗なスナップスローでボールを次々と投げている。

その動きは熟練のセカンドを思わせる。

「一体誰が教えたんだ？」

そう思ったとき、ふと一人の人物の事が頭に浮かんだ。

野球好きで、野球がとても上手い奴……
心当たりのある人物を見ると……

エッヘンと大きい胸を更に強調させているライがいた。

零治SIDE END

パンパン！！

これで2回目も終了です。

1回目は圧倒的大差で1組が勝ちました。

2回目は、他のクラスも私達のマネをしようとして更にバラバラになり、私達以外のクラスの力コには玉が殆ど入っていません。

数えなくても分かるほど、圧倒的勝利です。

「73、74、75……」

そこで私達の力コが空っぽになりました。

20位で勝利が確定し、そこからみんなで盛り上がってます。

『勝者、1組！！』

結果が出ると、盛大な拍手が湧き、私達は……

「いやっ！！！！」

更に盛り上がりました・
・
・
・
・

「みんな、よくやってくれた!!」

クラスの場所に戻り、エローシュ君がみんなに言います。

「今日の玉入れは俺達の完全勝利だ！これもみんなの協力あつての事だ！！本当にありがとう！！！」

そうやってみんなに頭を下げるエローシュ君。

「何言ってるんだよ……」

「そうよ、私達はエローシュ君の作戦に従っただけ。」

「そうだが、今回の一番の功労者はエローシュだ！」

「みんな……」

「みんな、エローシュを胴上げするわよ!!」

夏穂ちゃんの号令の元、みんながエローシュ君を囲み、持ち上げました。

「おい、みんなやめろって・・・」

「行くわよ!!ワッショイ!ワッショイ!」

「ワッショイ!ワッショイ!ワッショイ!」

「おい、みんなやめろって・・・止めるよ・・・た、助けくれ!!」

突然助けを求めるエローシュ君。

だけど、テンションが上がったみんなは聞こえてないみたいです。

「よし、みんな、もっと上げるわよ!!」

「おおー!!!!!!!!」

「お願いマジで止めて!!めっちゃ怖いんですけど!!」

「ルーちゃん・・・」

「キャラ、エリオ、エローシュ面白い顔してる・・・」

ルーちゃんは面白いものを見るように楽しんでいます。

「ルー・・・鬼だね・・・」

エリオ君も可哀想だと思ってるみたい。

「ワッシヨイ、わ・・・へくしゅん!!」

そんな時、夏穂ちゃんがかくしゃみをして掛け声が止まりました。
すると、みんなの手も止まります。

そして・・・

「えっ!?!ぎゃあああああ!!」

真上に上がったエローシュ君はそのまま地面に落ちていきました。

「アハハハハハハハハハ!!」

「ああ・・・」

大笑いしているルーちゃんの横で、私とエリオ君はため息しか出ませんでした・・・

さて、運動会も最後のプログラムへと進んでいきました。

組体操でエローシュ君がピラミットのてっぺんでイナバウアーをしたことはいい思い出です。

降りた時に、土台だった人にタコ殴りにされてましたけど・・・
っていうか古いです。

「さ、さあ最後のクラス対抗リレーだ！」

ボロボロになりながらも、みんなに声をかけるエローシュ君。

「走るの是一部だけど、みんな！しっかり応援してくれ！」

「「「「「「「「「「「OKエローシュ！」」「」「」「」「」

「よし、やあゝってやるぜ！」

「足引つ張らないでよ。アンタが一番遅いんだから・・・」

「うつ！？」

夏穂ちゃんは相変わらず厳しいです。

リレーの選手は私、ルーちゃん、夏穂ちゃん、男子でエローシュ君、佐助君、そして・・・

「流石に無理があると思うんだけど・・・」

エリオ君です。

「大丈夫だ、佐助！」

「持ってきた……」

佐助君がいきなり現れて、何かをエローシュ君に手渡しました。

「これは？」

「この海鳴市には面白いグッズを作ってる人がいてな。その人の発明品なんだけど、その名も『影が薄くなる！』」

裏声でエローシュ君が言いました。

しかしどこかで聞いたことがある言い方だったような気がします……

「これを使えば、いくらイケメンでも可愛い子でも注目されなくなるんだ！」

「くだらない。」

私もルーちゃんと同じです。

「作ったのは俺じゃないぞ！！ほら見ろ、ここにたぬき印があるだろ？ちゃんとした商品の証だ！！」

「それを見て買う2人がおかしいと思うよ……」

流石の真白ちゃんもエローシュ君に突っ込みました。

「何を言っただ、真白ちゃん。このためき印には様々な変わった商品があつて、インターネット上では予約がある程の・・・」

『一年生のリレーの選手は待機場に集合してください。』

エローシュ君が熱心に説明している途中にアナウンスが入りました。

「ほら、もうどうだっていいから早く行くわよ!!」

そう言つて夏穂ちゃんはエローシュ君の耳を引っ張って行きました。

「分かったから引っ張るな!!ほいエリオ。適当に塗っておけば大丈夫だから。」

「あ、ありがとう。」

エリオ君は影薄くなるを受け取り、移動しながら腕に塗り始めました。

つて塗るんだ・・・・・・

「さあ、最後だし頑張ろうぜ!!」

さて、リレーの順番ですが、

1 夏穂ちゃん、2 佐助君、3 ルーちゃん、4 エローシュ君、5 私、
アンカーにエリオ君と言う順番です。

エリオ君がアンカーの理由は、『一番速そうだからな。』と簡単な理由でした。

エローシュ君は今回特に作戦はないらしく、『このメンツは俺以外、
学年で1、2を争う位運動神経良いから恐らく問題ないよ。』とのこと
です。

「じゃあ私行くわね。」

「頑張つて夏穂ちゃん。」

「ファイト。」

リレーは一人100m、半周です。

なので抜くのは結構難しくなるので、いかに先頭をキープするかが
重要とエローシュ君は言っていました。

「よい……」

パン！！

ピストルの音が鳴り、一気に最初の走者が走り出しました。

「夏穂ちゃん、速い！！」

「いいペース。」

そう言いながらルーちゃんが立ち上がりました。

「頑張つてね、ルーちゃん……。」

「任せて！」

ルーちゃんはサムズアップして自分のコースへ向かいました。

「夏穂ちゃん凄い……そして佐助君も速いや。」

夏穂ちゃんは先頭の役割をしっかりとやりきり、1位で佐助君にバトンを渡した。

受け取った佐助君も足が速い。

相手に追いつかれることなく、バトンをルーちゃんに渡しました。

「任せる……。」

「任せて！」

ルーちゃんも足は速いです。
恐らくクラス1だと思います。

このままだったら結構楽に・・・

「えっ!?!」

後ろからかなりのスピードで2組の女の子が追いかけてきました。
とても速いです。

ルーちゃんとの距離を徐々に縮めていきます。

「エローシュ!!」

「任せろ!!」

なんとか1位を死守したルーちゃんでしたが、もう大分追いつかれてしまいました。

「ハハハハ! エローシュ、お前を抜いて目立ってやる!!」

「喋りながら話すんじゃないやねえよ・・・」

相手はドリル君です。

やっぱりエローシュ君より速いのは本当みたいで、徐々に追いつかれていきます。

「キャロ、頼む!!」

「はい!!」

私が渡された時にはもう差が殆どありませんでした。

(ここで私が差を広げなくちゃ!!)

そう思いながら地面を思いっきり蹴ります。

（私だってやるときはやるんだ・・・）

カーブに入り、私はなるべく内側を走っています。

2組の子は直ぐ後ろまで迫って来ますが、外側を走っているみたいで、抜かれてはいません。

（よし、このまま真っ直ぐ・・・）

後は直線一本。

エリオ君に任せれば・・・

その時でした。

（あれ！？）

足が何かに引っかかった！？
目線が下へと向かっています。

私はそのまま顔から転びました。

「痛・・・」

どうやら靴紐がほどけてたみたいです。

何で私こんな時に・・・

立ち上がって走ろうとしたとき、

「あっ!？」

2組の女の子に抜かれてしまいました。

「くっ!!」

私は急いでエリオ君の所に走ります。

「ごめん!!」

「任せて!!」

エリオ君は私からバトンを受け取るとダッシュで追いかけていきました。

「ルーちゃん、夏穂ちゃん……」

「「キャロ……」」

私は2人にどういう顔で話せば良いか分かりませんでした。
私の不注意の所為で……

「大丈夫、エリオがなんとかしてくれる。」

ルーちゃんはそう言って私を抱きしめました。

「ルー……ちゃん？」

「だから泣かなくても大丈夫だよ。」

えっ!？

私、泣いてなんか・・・

「あれ・・・？」

おかしいな、涙が止まらないよ・・・

「もう、まだ負けてないのに何泣いてるのよ、涙拭いてエリオの事応援しよう！」

夏穂ちゃん・・・

そうだ、まだ負けてないんだ。

私は目を拭って、

「エリオ君がんばれー！！」

応援しました。

エリオSIDE

（まずいな、結構速い。）

徐々に追いついてきてると思う。
だけど、どうしても抜けない。

カーブも中間に差し掛かり、もうゴールも目と鼻の先。

（ダメだ、諦めないぞ・・・僕を信じてアンカーにしてくれたんだ・・・諦めてたまるか。）

僕はそう決意して更に力を込める。

そんな時・・・

「エリオ君がんばれー！！」

少し涙声の声が聞こえてきた。

（今の僕は杉山君なんだけど・・・）

声の主はキャラだろうな・・・

キャラは結構抜けてる所があるから・・・

恐らくライさんに似たのだと思う。

（だけど、リラックス出来た・・・）

前にレイ兄に言われたことがある。

『何事も力の入れすぎは逆にマイナスになる。どんな状況でも冷静でいることが一番大事なんだ。』

（そうだ、冷静にだ・・・）

力は抜かない。

それでも熱くならず、冷静に……

直線になった。

抜くには今しかない!!

「行く!!」

歯を食いしばり、力を込める。

ここで抜くんだ!!

相手も僕がラストスパートをかけてきた事に気づいてラストスパートをかけてきた。

差は徐々に縮まってるが……

(駄目だ、間に合わない!?)

そう思ったその時、前にキャロとルーと一緒に見た野球のプレーを思い出した。

センター紅星のダイビングキャッチ。

(これしかない!!)

ハッキリ言って、少し怖いけど……

ゴールが目前となったとき、僕は思いっきりゴールへ飛び込んだ……

エリオSIDE END

「エリオ君！！」

私は駆け出しました。

エリオ君は間に合わないとみたのか、ヘッドスライディングでゴールしました。

ほぼ同着。

でもそんなことよりも、私はエリオ君の事が気になりました。

「エリオ、大丈夫か！？」

エローシュ君が肩を貸して、エリオ君を抱えあげます。

「結果は？」

「まだ分からない。しかしヘッドスライディングするとはな……
本当に凄い奴だよ……」

「えへへ……」

苦笑しているエリオ君をエローシュ君は中に運んで来ました。

肘とか膝には複数の擦り傷などがあります。

「エリオ君……」

「キャラ、流石に大声で名前を呼んじゃダメじゃないか。」

あっ!?

そういえば……

それってとてもマズイのでは……?

「大丈夫だ、それくらい誤魔化せるさ。」

なら安心です……

ってそんな事じゃなくて……

「ごめんなさい!!私のせいで……」

私はこの場にいる2人に謝りました。

「せっかくみんなが繋いでくれたバトンを……私は……」

「キャラちゃん……」

頭を下げている私にエローシュ君が近づいて……

「ほっ!」

頭にチョップをされました。

地味に痛い……

「何するんですか……」

私は頭を抱えて文句を言いました。

「キャラちゃん、人には絶対何て無いんだ。誰だってミスはする。だからそんなに気にする必要なんてないんだよ。」

「ですけど……」

「キャラ、エローシユの言うとおりだよ。僕だってミスはするさ。一生懸命やったキャラを責めないよ。」

「エリオ君……」

「キャラちゃんは頑張った……」

「佐助君。」

いつの間にか近くに来ていた佐助君にも言われる。

「それにね……」

そう言つてエリオ君は本部があるテントを見ました。

「負けると決まった訳じゃないよ。」

『ただいまの判定の結果……1位、1組!』

その瞬間、私達のクラスから歓声が湧きました。

「ね、キャロ。」

「そう・・・ですね・・・」

その後、クラスに戻った私達は今もみくちやにされながら暖かい祝福を受けました・・・

零治SIDE

「エリオ。」

俺は救護室に来ていた。

エリオに話したかった事もあるし、エリオの怪我に真っ青になったフェイトの様子も気になったからだ。

キャロ達は今、閉会式を行なっている。

「あつ、レイ兄!!」

どうやらエリオは元気そうだ。

「こらエリオ、まだ動いちゃダメだよ!!」

「あつ、ごめんなさい……」

「おい、擦り傷くらい大丈夫だろ……」

「ダメだよ!! 変なバイキン入ったらどうするの!？」

フェイトは将来絶対に子煩悩だな。

下手をしたらモンスターペアレント何かもありえるかも……

「それくらい大丈夫だって。それよりエリオと話があるんだけど……」

「僕と……ですか？」

「ああ、だからちょっと借りるな。」

そう言つてフェイトからさっさとエリオを連れていく。

「ちょっと、まだ駄目だ……っていない？」

「ここならいいだろう。」

俺は校舎脇にレアスキルでジャンプしてエリオと離れた。

この話はまだフェイトに聞かせていい話じゃないしな。

「で、話ってなんですか？」

「エリオ、キャラのクラスメイトはどうだった？今日一緒にいてみてどう思った？」

「……みんないい人でした。親切で、面白くて……」

「そうか……エリオ、お前学校通う気はないのか？」

「……ごめんなさい、僕は……」

「恩返しの為に管理局にか？」

「……！何でそれを！？」

「俺の推測。フェイトに断られたと聞いて、そうじゃないかと思ったんだ。」

「というのは建前で、わずかな原作知識でそうなんじゃないかと思うただけなんだけど……」

「僕は……助けてくれたフェイトさんに恩返しがしたい！少しでも早く……」

その気持ちは痛いほど分かるんだけど……

「お前はそれでいいのか？今日皆と一緒にいて、勉強したり、みんなと遊んだりしたいと思わないのか？」

「・・・・・・・・・・思いました。けど・・・」

「なら学校に行くべきだ。」

「えっ!？」

「恩返しなんて、いつでも出来る。ただな、小学生でいられるのは今しかないんだ。」

「で、でも・・・・・・・・」

「魔法の訓練なら俺や星達が教えてやれるし、なのは達だって学校に行きながら管理局に務めてるんだ。問題ないだろ？」

「そ、そうですね・・・・・・・・それだとフェイトさんに迷惑が・・・」

「お前な・・・・・・・・今更迷惑だなんて考えるな。人はな、必ず助け合ってるんだ。1人で出来ることなんてたかがしれてる。俺だって、フェイトだって。だからな・・・・・・・・」

そう言つて俺はエリオの頭を撫でた。

「一杯迷惑をかけてやれ。それで大きくなったらそれ以上にフェイトを助けてやるんだ!!ギブアンドテイク。悪くないだろう?」

「・・・・・・・・はい!」

どうやら分かってくれたみたいだな。

「それじゃあ早速フェイトに話してみるか。アイツ、絶対に喜ぶぞ。」

「そうでしょうか・・・?」

「もしそうじゃなかったら俺のモンバスの超レア素材タダでやるよ。」

「本当ですか!？」

「ああ、本当だ。」

この後、俺達はフェイトを見つけ、今の話をした。

フェイトは簡単に了承。

リンディさんにもその場に連絡して、OKを貰った。

保護施設やら何やらの手続きの影響で、実際に学校に来られるようになるのは来週からになるみたいだけど、エリオは終始笑顔だった。
・
・

零治SIDE END

第7話 運動会です！（後編）（後書き）

エリオ君、次から1組に編入させたいと思います。

それと、エリオ君の目的が原作と違うかもしれませんが、もし、駄目だったら指摘してもらえるとありがたいです。

しかし今回はかなり苦労しました……

アイディアはありましたし、別に忙しかった訳でも無いのですが、何故か中々進みませんでした……

スランプ……ですかね？

まあスランプは実力のある人の言葉なんですけど……

取り敢えず、本編の体育祭を終わらせて、エリオ君の活躍を書きたいと思います。

これからもよろしく願います。

第8話 エリオ君が学校に転校してきました！なのにルーちゃんが不機嫌で怖い

こんにちはblue oceanです。

遅くなつてすいません。

こっちも風邪の影響で遅くなつてしまいました。

なるべく早く前のペースに戻せるようにしますので、これからよろしく願います。

第8話 エリオ君が学校に転校してきました！なのにルーちゃんが不機嫌で怖い

運動会から1週間が経ちました。

あの後からの学校は至って平和でした。

ただ、昨日行った中学の体育祭はとても面白かったです。

お兄ちゃんが犬さんになったり、ライお姉ちゃんが猫さんになったりしてとても盛り上がってました。

こっちに來てから楽しい事ばかりです。

「今日は転校生を紹介するわね。」

朝の会、細野先生が言いました。

みんなの目がキラキラしています。

前みたいに佐助くんの隠しカメラは細野先生の手により、完全に撤去されており、クラスの人達は誰が転校するか分かってません。

知っているのは私とルーちゃんだけです。

「先生、MAN? WOMAN?」

「何でわざわざ英語で聞いてくるのか不思議だけど、男の子よ。」

エローシュ君はそう聞くと、チツと舌打ちをして静かになりました。

キラキラ目を光らせていた男子の目が一気に冷めてます。

「あなたたちは……その反応は流石に彼に響くわよ……彼はあなたたちと会うのを楽しみにしてたんだから。」

「彼？俺達の知ってる奴か？」

「そうよ、あれだけ彼に手伝ってもらったのに忘れちゃうの？」

それを聞いて、エローシュ君は誰が転校するのか分かったみたい。

他のクラスメイトも、もしかしてとヒソヒソ話し始めた。

「それじゃあ入っていいわよ。」

先生がそう言うのと扉が開き、ランドセルを背負ったエリオ君が入ってくる。

「みんな久しぶり……」

「……………エリオ君！！」「……………」

クラスみんなが驚いた声をあげました。

「こら！朝の会なんだから静かになさい！！それじゃあ、みんな知ってると思うけど、自己紹介お願いね。」

「はい、エリオ・モンディアルです！みんな、これからよろしくお願いします！！」

そう言つてエリオ君は深々と頭を下げました。

「モンデヤ・・・ぐふっ!？」

「変態!！」

夏穂ちゃんの投げた筆箱がエローシュ君の頭を直撃。

つていうか夏穂ちゃん、筆箱は流石に投げちゃ駄目ですよ・・・

「・・・俺、いつか夏穂に殺されるのでは無いのだろうか？」

「・・・今更そんなことに気づくエローシュに敬意を称する。」

「よせや、照れるやないか。」

エローシュ君、佐助君は誉めてないです。

「それじゃあ恒例の質問タイムといきましょう。」

先生がそう言つとクラスメイト（特に女子）が一斉に手を上げました。

「それじゃあ・・・木原さん。」

「はい!あの・・・ちよつと待った!！」

木原さんが何か質問しようとした時、エローシュ君が割って入りました。

「ハア・・・もういい加減静かにしてほしいんだけど・・・」

「くっ、冷たい・・・だが、これは聞かなくてはならない!!」

そう言っただけ言葉を切り・・・

「あの金髪お姉さんの胸のサイズは・・・げフツ!？」

そう聞く前にエローシュ君の所に行った夏穂ちゃんのグーパンが脇腹に直撃しました。

エローシュ君が悶絶しています・・・

「あの・・・大丈夫なんですか？」

「ああ、あれがいつも通りだから気にしないで。」

「はあ・・・」

その気持ち分かりますよ、エリオ君。

そんな感じで、エローシュ君の所為で自己紹介は締まらず終わりました。

「学校って面白いね。」

ただいま昼休みです。

いつもの様に円を作ってお弁当を食べています。

ただ、そこにはエリオ君も混ざっています。

「変なクラスだけど、馴染んでくれて助かるわ。」

夏穂ちゃんは苦笑いしながら言います。

「だけど凄い人気だね・・・」

「確かにそうですね・・・」

真白ちゃんがそう言って校舎の方を見ました。

校舎の方にはエリオ君を見に来た別のクラスの女の子が物陰から覗いています。

「このリア充・・・」

「えっ！？なんでルー怒ってるの？」

ルーちゃんは今日はずっと不機嫌です。

エリオ君に話しかけようとして、何度も取り巻きの女の子に邪魔さ

れたのが原因だと思います。

「フン。」

ルーちゃんはそのぽを向いて、エローシュ君の弁当からおかずと取って食べました。

「あの……ルー様？何故にわたくしめのオカズを食べているのでしょうか……？」

「うるさい、エローシュは黙ってお弁当差し出せばいい。」

「ノオオオオオオオ！！」

エローシュ君、八つ当たりされてます……

こういうときは……

「ドントマインド。」

「キャロちゃんその言葉好きだね!？」

何かカッコいいと思います。

エリオSIDE

初めての学校、結構緊張して登校したんだけどな……

「モンデヤ……ぐふっ!？」

エローシュが筆箱投げられてた……

その後もエローシュ君は冷たい目で見られてたり、筆箱投げた女の子にパンチされたりと散々な扱いだった。

「あの……大丈夫なんですか？」

「ああ、あれがいつも通りだから気にしないで。」

「はぁ……」

先生にそう言われて、僕は空返事を返す事しか出来なかった。

「ねえ、エリオ君ってどこから引越して来たの？」

「好きな食べ物何？好きなアニメとかある？」

「何かスポーツとかやってる？」

ただいま休み時間ですが、女の子から質問攻めにあっています。

「「「ねえねえ．．．．」」」

もう勘弁してほしいなあ．．．．

僕は助けを求めるように回りをを見た。
するとルーがこっちの様子を見ていた。

「ルー助け．．．」

助けを求めようとしたらそっぽを向かれた。

僕、何かしたっけ．．．．？

それからずっとルーの機嫌は悪いままだった．．．．

エリオSIDE END

「はいそれでは帰りの会を終わります。皆さん気を付けて帰ってください。」

エリオ君が転校してきて慌ただしかった学校も終わりです。

エリオ君人気は相変わらず高く、未だにエリオ君に声をかけようと廊下に待ちが出ている位です。

「リア充は死ねばいいんだ……」

「ちょっと、ルーちゃん!？」

ルーちゃんも終始不機嫌でした、まあ八つ当たりは全部エローシュ君だったので、問題無かったのですが……

「ルーちゃん、今日ちょっとおかしいよ、エリオ君にも冷たいし……」

「……そんなことない。」

「ルーちゃん……」

その後もルーちゃんはずっと不機嫌そうでした……
どうしたらいいのかな……？

「仕方ないな……」

「エローシュ？」

ル―SIDE

今日はエリオが転校してくる日。

結構楽しみにしてた・・・

夏に初めてキャラ以外の友達で、初めての男の子の友達。
優しくて気が利くとても良い子だ。

別荘の時もとても楽しかったし、次に会える日もとても楽しみだった。

なのに・・・

「ねえ、エリオ君ってどこから引越してきたの？」

エリオは終始女の子に声をかけられていた。

それを見て、困ってる様にも見えただけ、満更でもなさそう。

・・・女好き。

「ルーちゃん、今日ちょっとおかしいよ、エリオ君にも冷たいし・・・」

それは・・・
でも・・・

「・・・そんなことない。」

「ルーちゃん……」

そんな目で見ないで欲しい。

私だって普通にいたいんだけど……
何故かエリオを見てるとイライラする。

「ちよつといいか？」

そんな時、アホエローシュが私達に話しかけてきた。

「何？今エローシュの相手をする暇が無……」

そこまで言いかけて、私は黙った。

エローシュが普段見せない真面目な顔だったからだ。

「キャロちゃん、ちよつとルーちゃんを借りるな。」

「えっ！？エローシュ君！？」

「悪いけど待ってて。」

私はルーにそう言ってエローシュについて行った。

「この辺りで良いか。」

エローシュに連れられてきたのは、音楽室などがある校舎の方の階段。

確かにここなら滅多に人が来ない。

「で、話って何？」

「ルーちゃんが何でそんなにエリオを見てイライラするのか教えてあげようか？」

「なっ！？別に私はイライラなんて・・・」

「何だ？気づいてると思ったけど、気づいてなかったのか？」

「私は別にエリオが原因ってわけじゃ・・・」

「取り敢えず、俺から一つだけ忠告しとくぞ。」

エローシュは私の意見など聞く耳を持たず、話を続けた。

「エリオはモテるぞ・・・今のままだったらエリオはルーちゃんからドンドン離れていくだろうな・・・」

「そんな事・・・」

「おっと。」

殴りかかったが、エローシュに簡単に止められてしまった。

「何だ、怒るところからすると、やっぱりエリオの事が・・・」

「違う！！ただエリオは大事な友達で・・・」

回想・・・・・・・・

別荘の海でエリオと2人で遊んでいた時の話だ。
私達は砂でお城を作っていた。

「ルー、これ見てみなよ！」

エリオが見せてきたのは貝殻だった。

「これは？」

「そこで綺麗な貝殻見つけちゃった。」

「本当だ・・・・・・・・」

エリオが見せてくれた貝殻は虹色にキラキラ光ってて、とても綺麗だった。

「・・・・・・・・ちょっと待ってて。」

私が貝殻をじいっと見ていたのを見て、そう言った。

そして、エリオは走って別荘の方へ向かっていった。

一体どうしたのだろう……

20分後……

「ルーー!!」

「遅い……」

私は既にお城を作り終わっていて、ぼーっと海を見ていた。

「ごめんってお城凄!？」

「ありがとう。」

「ってそうじゃない、ルーちゃん!」

少し強めに名前を呼ばれて私は強ばった。
私、何か怒られる事したっけ……?

「はい!」

そんな不安をよそにエリオは私に何かをくれました。

「これって!？」

「そう、さっきの貝殻。」

渡されたのはさっきの貝殻。

だけど、貝殻には長い紐が付いていて首にかけられるようになっていた。

「ルーちゃんにプレゼント。」

「私に・・・？」

「うん。はやてさんに作って貰ったんだ。しかも『壊れないようにコーティングもしといたる！』って気合入ちゃって・・・ちよつと時間経っちゃった・・・」

私はそんな話なんて耳に入らず、ずっと貝殻を見ていた。さつきよりも光ってとても綺麗だからだ。

「・・・ねえルーちゃん。」

「えっ？何？」

「付けてみてよ。」

「えっ！？うん・・・」

ちよつと恥ずかしい思いはあったけど、言われたとおり付けてみた。

「・・・どう？」

「似合ってる、可愛いよ。」

「ルーちゃん、どうしたの？顔が赤いけど・・・」

「な、なんでもない!!」

私ったら何であの時の事を・・・

「ともかく、俺が言いたい事は、そんな冷たい態度ばかりとつてると、エリオはお前からドンドン離れていくぞ。」

離れていく・・・

「それは嫌だ・・・」

女の子にヘラヘラしてるエリオも嫌だけど、私から離れていくのはもっと嫌だ・・・

「そうか、なら謝るんだな。今日の態度じゃエリオは嫌われてると思ってるぞ。」

そうだ、先ずは謝ろう。

全てはそこからだ。

「分かった、そうする。ありがとうエローシユ。」

「どういたしまして。俺もこれで弁当の被害も収まるし、大助かりだ。」

「それは無い。」

「少しは自重してくれよ!!」

その後2人で笑い合った。

今度、また何か相談事があったらエローシュに相談しよう。

「キャロ、ごめん!」

「あつ、ルーちゃんおかえり!」

私が教室に戻ってくると、机に座って本を読んでいるキャロがいた。

そして……

「ルー。」

エリオもいた。

「エ、エリオ……」

何してるんだ私……

エリオに謝らなくちゃいけないのに……

「良いんじゃない。リア充なんてほっとけば。」

「でも困ってるよ。」

そう言われてエリオを見てみると、エリオが助けを求める小動物みたいで少し可愛かった……

「まあ大丈夫でしょ。それより今日、キャロの家に行っていいい？」

「うん、いいよ！」

こうして私達はエリオを置いて帰った……

ル I S I D E E N D

第8話 エリオ君が学校に転校してきました！なのにルーちゃんが不機嫌で怖い

ちよつと恋愛つぼくしてみました。

次もエリオを中心とした話でいきたいと思います。

次もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6362y/>

有栖キャロの小学校物語

2011年12月14日06時48分発行